

地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

DePOLA

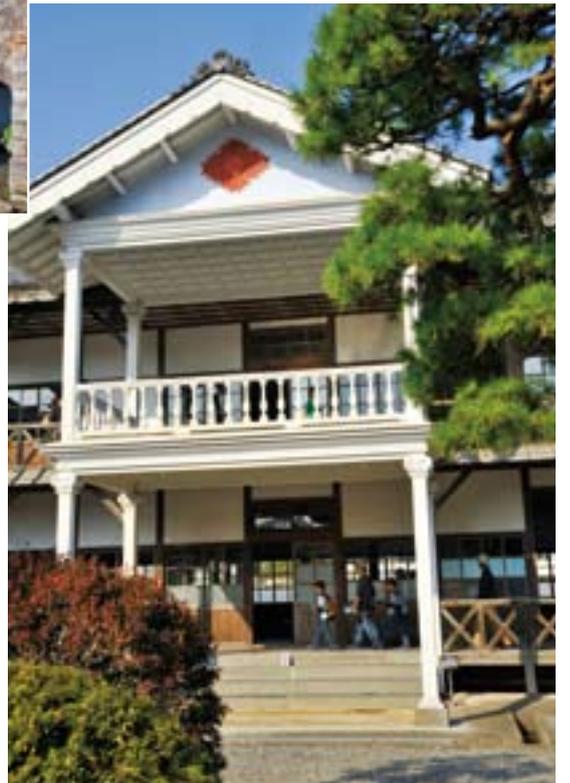
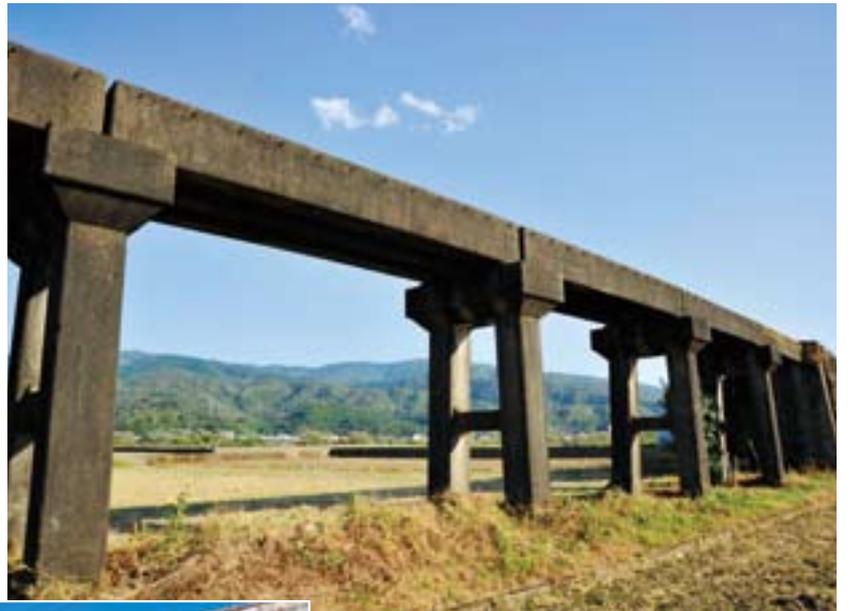
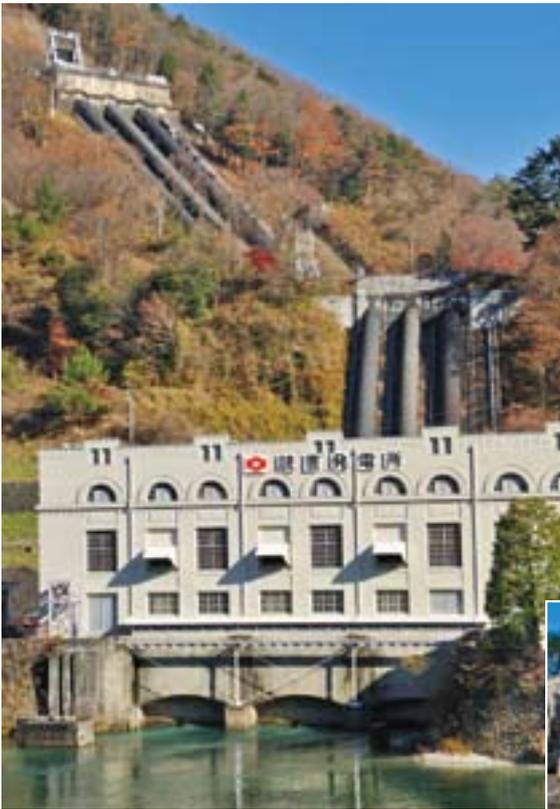
でほら

38

2010年
春夏号

特集

進取の英知を未来へ 近代化遺産



宝くじ

本誌は、宝くじの普及宣伝事業として作成されたものです。

進取の英知を未来へ 近代化遺産

●特集企画に寄せて



上／根釧台地の格子状防風林周辺にある乗馬クラブ(標茶町)
下／稚内港北防波堤ドーム(稚内市)

近代化遺産とは、国家や社会の近代化に

連する文化遺産で、「幕末・明治維新から明治、大正、昭和の第二次大戦期までの間に建設され、日本の近代化に貢献した産業、文化、土木に係る建造物」と文化庁が定義している。対象の建造物は、鉄道、鉱山、トンネル、橋、河川、製鉄、造船、製糸業等の日本の近代化に係ってきた施設で、従来の文化遺産保護制度では対象にはなりなかったものも含まれている。これは文化財保護法の一部改正(平成6年)により、建造物に「登録制度」を導入したため、時代が多少新しくても文化財指定を受けることが出来るようになったという経緯もある。

平成2年(1990)から文化庁の支援で、各都道府県の教育委員会が各地の近代化遺産の調査を実施し、5年に重要文化財建造物に「近

代化遺産」という名称を付け、群馬県碓氷峠鉄道施設等が登録された。以来各地の重要文化財建造物は「近代化遺産」というカテゴリーで保護していくことになった。17年からは「近代産業・交通・土木」という名称が使われるようになり、従来の指定物もここに含まれている。

現在「近代化遺産」指定の重要文化財は63件、その他17件あり、計80件(平成22年)。これらの遺産を有する地方公共団体による全国近代化遺産活用連絡協議会も発足、また旧工部省の設立日である10月20日は「近代化遺産の日」として、イベントや研修会も開催されるようになった。また経済産業省も、産業遺産を地域活性化のために有効活用する観点から、産業遺産活用委員会を設けて、各地の産業遺産を公募、その実態調査を行った。「近代化産業遺産」の場合は、その地域に根付いた産業の姿を伝える遺物や遺跡、鉄工、土木、工業等の他に、農林水産、商業も含まれる。技術的、科学的価値のあるものも含まれるため多岐に渡っている。平成19年には33件の「近代化産業遺産群」と575件の個々の認定遺産を公表、さらに昨年は33件の遺産群と540件の認定遺産が登録されている。

明治維新により、長い鎖国時代を終えて開

国した日本は、近代化に向けて急速に歩み始めた。県を置く、郡を置く、そのための施設を造る、小学校を開設する等々、その取り組みは音を立てて鳴り響くようで、人々にも新しい時代の到来を実感させたに違いない。しかも当時の建造物を見ると、従来の日本的な技の中に西洋的なものを取り入れたモダンな建物が多いのが特徴である。また設計者と地元の大工が

進取の心意気で施工した建物は、驚くほど機能

的で現在でも十分使用できるものが多い。

さらに国や地域の産業を発展させるための殖産興業、水利、港湾、干拓、鉄道等の大規模工事も始まる。国や県郡の予算もそれほどなかった時代、地域の人々も進んで仕事に当たったことだろう。煉瓦や石組みの技の見事さ、景観を活かし、厳しい気象条件にも耐える堅牢な施設。現在専門家が見ても驚嘆するものが多い。

地域住民の生活や産業の発展に深く係って

きた文化財。しかし一方で、これらの近代化遺産は土木や水利等の地味なものが多いため、役目を終えると崩壊したり撤去されたものも数多くあった。いまも注目されることもなく、放置されている施設もある。「近代化遺産」(近代化産業遺産)として保護していくことになったのは、これらの建造物や各種の事業の遺跡を保全していくとともに、日本の近代化、国際化に取り組み、地域産業の発展に当たってきた人々の進取の精神を、いまこそ私たちが学び直していくことが求められているからだと思う。

自治体によっては、過去の遺物的なものでは観光にも役立たないし、保全や修復の予算もないからと消極的な対応もままあるが、「近代化遺産」になったものの中には、地域住民による保全活動とアピールによって登録され指定されたものも多い。

新しい時代を構築し地域の発展に貢献した施設や先輩たちの心意気を次世代へ継承していくという地域住民の活動こそが、「近代化遺産」に光を当て、活きた誇り高い遺産になる。そのことを痛感した取材でもあった。

「てぼり」編集部

財団法人過疎地域問題調査会

進取の英知を未来へ—[近代化遺産]

特集企画に寄せて 2



佐賀家ニシン番屋。漁夫たちの宿舎跡(北海道留萌市)

■北の大地に夢を拓いた[北海道遺産]

- ・厳しい気象から酪農地帯を守る
根釧台地の格子状防風林
(根室地区 標津町、中標津町、別海町、標茶町) 4
- ・稚泊航路時代の歴史を刻む
稚内港北防波堤ドーム
(北海道稚内市) 8
- ・ニシン漁で湧いた男たちの夢舞台
佐賀家ニシン番屋
(北海道留萌市) 10

■新時代を先取りした近代化施設

- ・厳しい大自然に凜として立ち向かう
尻屋埼灯台と寒立馬(青森県東通村) 13
- ・軍港に水を供給した精巧な石造りダム
旧大湊水源地堰堤(青森県むつ市) 16
- ・水力発電事業黎明期の気概を伝える
読書発電所・桃介橋(長野県南木曾町) 17
- ・石炭や物資を輸出する特別貿易港
三角西港の石積埠頭(熊本県宇城市) 20
- ・西洋の新技术も導入して地域・産業を近代化
旧郡築新地樋門・市街地の文化財建造物
(熊本県八代市) 22

■政都・郡都として賑わった街

- ・明治のロマン漂う伊達藩の城下町
旧登米高等尋常小学校他(宮城県登米市) 25
- ・“史跡の宝庫・萩”のもう一つの魅力
鑄造・造船で近代化に挑戦(山口県萩市) 28



上/三角西港の石積埠頭
(熊本県宇城市)



下/萩反射炉(山口県萩市)



石見銀山・清水谷製錬所跡(島根県大田市)

■地域の歴史文化を次世代へ

- ・[世界遺産の街]の保全と新たな魅力づくり
石見銀山・温泉津温泉
(島根県大田市) 30
- ・地域の宝として引き継ぎ、
交流人口の拡大を
魚梁瀬森林鉄道
(高知県安田町、馬路村、田野町、北川村、奈半利町) 34
- ・製糸産業黄金期の威容を誇る／**藤村製糸(株)** 37

「でぼら」とは——

Depopulated Local Authorities (人口が減少した、つまり過疎化した地方自治体)からのネーミング。

過疎市町村の多くは山間地や離島など森林面積の多い農山漁村地区で、全般に人口の減少や高齢化が進んでいます。国土の保全・水源のかん養・地球の温暖化の防止などの多面的機能により、私たちの生活や経済活動に重要な役割を担っています。このような過疎地域は、豊かで貴重な自然環境に恵まれ、伝統文化や人情あふれる風土が数多く残っています。

多くの人たちが過疎地域を理解し、過疎地域と都市地域が交流をすすめ、共生していくためのホットラインとして、また過疎地域相互間の情報誌として「DePOLA」(でぼら)を発行しています。

●表紙写真

- 左上/読書発電所(長野県南木曾町)
- 右上/魚梁瀬森林鉄道遺産立岡二号棧道(高知県田野町)
- 左下/尻屋埼灯台と寒立馬(青森県東通村)
- 右下/旧登米高等尋常小学校(宮城県登米市)
- 中/旧郡築新地樋門(熊本県八代市)

INFORMATION — 各地の近代化遺産・近代化産業遺産 38

○卯之町が重要伝統的建造物群保存地区に(愛媛県西予市宇和町) ○煉瓦窯再生プロジェクトも発足(福島県喜多方市) ○瀬戸川沿いの白壁土蔵・酒蔵(飛騨市古川町) ○明治時代建造の現役灯台 ○52件の北海道遺産 ●過疎地域自立促進特別措置法の一部を改正する法律案要綱



厳しい気象から酪農地帯を守る 根釧台地の格子状防風林

(北海道根室地区／標津町、
中標津町、別海町、標茶町)

●北海道遺産とは……

北海道では平成9年、当時の堀達也北海道知事の提案で、自然・文化・産業の中から次世代に継承したいものを保全しようという北海道遺産推進プロジェクトチームを発足した。各市町村より応募のあった史蹟等を北海道遺産推進協議会が協議し、有形無形の財産群を「北海道遺産」として選定した。現在52件が「北海道遺産」に認定されている。

その中から、北海道開拓時代の先進的な施策「根釧台地の格子状防風林」、水産漁業で賑わった頃の歴史的遺産である留萌市の佐賀家「ニシン番屋」、稚泊航路を支えた「稚内港北防波堤ドーム」を紹介することにする。

●我が国最大の防風保安林



▲開陽台から見た晩秋の根釧台地の格子状防風林

一直線にのびた幹線道路の両側にはカラマツやトドマツ、アカエゾマツ等の手入れされた人工林がどこまでも続いている。樹齢50～100年になる木々は天高く伸び、クルマの音も人の声も森

や大地に吸収されてしまうほどだ。こんな帯状の林が約3km(1200～1800間)間隔で縦横に設置され、帯幅100間(約180m)の格子状の美しい模様を形成している。それらの森に囲まれた陽だまりの中に人家・牛舎、牧草地があり、牛たちがのどかに草を食べている。北海道根室地方を代表する美しい雄大な風景だ。

▶防風林を記帳した地図
(根釧東部森林管理署提供)



▶道路脇の防風林の中に設けられた草地。間伐作業時にクルマや木材を置くためのものと思われる



この「格子状防風林」は、標津町、別海町、中標津町、標茶町の4町内にまたがる国有林、民有林で、総面積は1万5千ha余りと我が国最大の防風保安林群となっている。直線部が最も長いところは27kmもあり、規模の大きさから人工衛星からも捉えることができるという。防風林は明治30年頃に始まった開拓当初、1800間(3300m)毎に設け(後に1200間/2200mに変更した地区も)、幅は50間(91m)以上100間(180m)以内と規定されて設置された。各地の防風林が農地拡大に伴い消えていった中で、いまでも開拓時代の姿を残している貴重な森林群だ。

その6割ほどは国有林で、林野庁北海道森林管理局が防風機能の維持と地域の木材資源の利用のため、人工林部分の間伐や、次世代の苗木の植え付け等の森林施設を行っている。また、格子状防風林の中の私有地にも各戸が耕地防風林を設け、風や霧から家や農地を

守る工夫をしている。

防風林の維持管理を行っている根釧東部森林管理署を訪ねた。標津町の根釧台地東部入口にある瀟洒な建物。応対してくれた道音次長が「私は今年ここに赴任してきたばかりですの」と言って資料を用意してくれた。

同署が管理する森林を記入したA版特大の地図には、縦横に配置された格子状防風林が緑色に記帳してある。規則的に配された森林の帯が風や霧の通路となる地区を埋めている。明治の開拓時以来、防風効果を損なうことのないように見回り、維持管理をし続けてきた森林作業員たちの努力が窺える。格子状防風林の他に、この管内国有林には世界自然遺産の知床国立公園、ラムサール条約登録湿原の野付風蓮道立自然公園、野付半島のトド原等も含まれており、国有林野面積は106千ha。原生的な林野と野生生物が多様に棲息する大変貴重な自然景観地でもある。

●アメリカ合衆国の「直角区画法」を導入

北海道の防風林設置は、開拓当初から農作物の保護を目的に計画的に設定され、根釧台地は明治30年頃から開拓がはじまったという。政府は明治2年に開拓史を設けて、顧問として来日したアメリカ合衆国農務局長ホールズ・ケプロンの提言で、アメリカが行っている「直角区画法」を導入した。直角区画法とは、まず基線を設けて直角に交わる基号線を造り、それに沿って道路等を設けて方形の区画をつくり、入植者の土地や市街地を設置するというもの。

当時の北海道根室地方は殆どが自然林で覆われていたから、森林を残して道路、市街地、農地を開発していったものと思われる。しかし戦後は、食糧増産から道内各地で大規模な農地拡大が進み、畑が狭い、日陰になる等の理由で国有防風林の開放や土地利用区分の再編成が行われた。そのため多くの防風林が消えていったが、根釧台地では厳しい気候から、防風保安林はそのままの形を現在に残している。

夏には冷たい海霧が発生、冬には吹雪で真っ白、視界がなくなる「ホワイトアウト」という現象も起きる。霧は防風林に当たると、木の高さ分だけ消える効果があり、内陸部への霧の侵入を防いでくれるという。防風効果も樹高の20倍程度の範囲の風を低減させる効



▲個人が設けた防風林の中で牛たちがのどかに過ごす

右上/カラマツとアカエゾマツ等の整備された混交林 右下/白樺が自生する森(標津町) 左/農家の庭で飼育されているポニーたち(標津町)



では成長が早く寒さに強いカラマツが植えられました。昭和50年代になると、郷土樹種であるトドマツやアカエゾマツに変わってきました。現在も伐採により防風効果が減退しないように、地域の状況を考慮した施策を行っています」と道音次長から資料により説明があった。

果があり、農作物だけでなく、そこに暮らす人や生き物の生命を守るものとして大切に守られてきたのである。森林施業はいまどどのように行われているのだろうか。

「人工造林は昭和初期から始まり、防風効果を高めるために昭和20年代から積極的な植林が行われたようです。当時から昭和40年代までは成長が早く寒さに強いカラマツが植えられました。昭和50年代になると、郷土樹種であるトドマツやアカエゾマツに変わってきました。現在も伐採により防風効果が減退しないように、地域の状況を考慮した施策を行っています」と道音次長から資料により説明があった。

「人工造林は昭和初期から始まり、防風効果を高めるために昭和20年代から積極的な植林が行われたようです。当時から昭和40年代までは成長が早く寒さに強いカラマツが植えられました。昭和50年代になると、郷土樹種であるトドマツやアカエゾマツに変わってきました。現在も伐採により防風効果が減退しないように、地域の状況を考慮した施策を行っています」と道音次長から資料により説明があった。

きめ細かい植樹を続け、人工林の部分では、間伐(間引き)を繰り返しながら、そこにヘクター当たり1000本平均のトドマツ、アカエゾマツなどの苗木を植え込んで複層の森を造る。建築材には不向きといわれたカラマツも加工技術の進歩で優良木材としての需要が高まり、森林管理署では間伐した立ち木や丸太の販売などにも取り組んでいる。道路脇にたえずむと、森からは紅葉した木の葉が舞い落ちる音に混じって、越冬の準備に忙しい野鳥たちのさえずりが賑やかに聞こえてくる。これらの森や河川にはオジロワシ、タンチョウヅル等の貴重な生物が羽を休め、この地方特有の昆虫も多数棲息している。取材に訪ねた10月下旬には、北海道では雪の便りも聞かれ、海岸は風が強くて冷たかったが、防風林帯に入ると汗ばむほど穏やかになり、晩秋の陽だまりの中では牛たちがのどかに草を食べていた。



幹線道路に面した標津町茶志骨の郷野さんの家は牛80頭を飼育する大規模酪農家。この日は牛たちはもう一つ先の森の中にある牧草地へ出かけ、家の庭では4頭のポニーがいて親しげに出迎えてくれた。「昔に比べると冬も大変生活しやすくなりましたよ」と奥さん。格子状防風林が最もよく見える場所が、中標津町の開陽台。星に近い展望台として北海道を訪れるライダーが夏場を過ごす場所として有名だ。この時期、放牧していた牛たちも其々の牛舎に戻ったため、眼下に広がる草原は初冬の午睡を楽しんでいる風情。その先には幾重にも帯状の森が連なり、森の中に牧草地と家屋が点在している。金色に輝くカラマツ

ツ林とトドマツ等の針葉樹林、これらの森が縦横に地平線まで広がっている。

●豊かな自然環境を生かして

標茶町虹別地区では、森の中に素晴らしい別天地を発見した。広々とした庭の一隅にお洒落な洋館(ホテル、レストラン)があり、その先にはアウトドア施設、厩舎と馬場、庭園、農園がある。「ヘイゼルグロウスマナー」という名前の交流・宿泊施設で、大自然の中で乗馬やカヌー、カヤック、釣り等を楽しむことができる。ミズナラやカシワの巨樹が茂る庭の奥には厩舎があり、サラブレッド馬10頭、ポニー2頭が飼育されている。

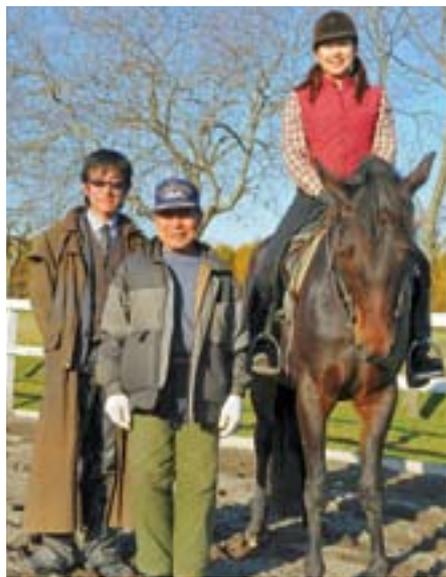
馬の世話と乗馬係をする小玉路子さんが、仕事を終えた後1頭に乗ってコースを走らせてみせてくれた。ぴったり息が合って、見ても心地よい。

小玉さんは埼玉県狭山市から今秋ここへ就職したばかり。「実家のある狭山で乗馬クラブに10年通い、馬の魅力の虜になっていました。このホテルにも時々来ていたのですが、

◀豊かな自然の中に建つ「HAZEL GROUSE MANOR」。ヘイゼル(茶褐色) グロウス(雷鳥) マナー(マナーハウス) から「蝦夷雷鳥の館」とも言われる



◀乗馬を楽しむ小玉さん
▼ホースライディング場で馬の世話や乗馬を指導する、左から西村さん、山口さん、小玉さん



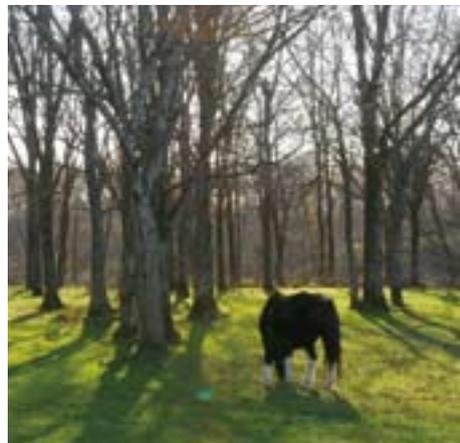
馬の世話と乗馬ができるというので移住してきました」と嬉しそうに語る。

乗馬インストラクターのチーフ・西村徹成さんは苫小牧市出身。「この秋はカラマツが金色になり大地も金色の絨毯になります。防風林の中を馬とライディングするには最高のコースで、冬も素晴らしいですよ」

山口正男さん（85）は地元標茶町から馬たちの世話に11年間通ってきている。「これほど豊かな自然に恵まれた場所は北海道でも少ないと思うね。ゆつくり過ごしたいと都市からやってくるお客さんが多く、数日間滞在していきます」

ヘイゼルグラウスマナーのオーナーは内海通さん。川崎駅前まで三代続いている総合病院の理事長で、医大時代に研修医として道東の根室市立病院に勤務。その時にこの大自然に深く感銘し、山荘を建て休日には乗馬を楽しんでいたが、15年の構築期間を経て1万坪の敷地を整備、イギリス・カントリ的なホテルをオープンした。敷地内には摩周湖を源泉にする伏流水の小川もあり、真冬でもクレンソクが取れる。四方を防風林に囲まれているため、農場では野菜栽培も可能で、自家産の有機野菜とオホーツクの海の幸がホテル客に人気だという。

支配人の菅原吾郎さんは「僕も東京から来ていますが、森の中を歩くのが何よりも好きです。冬に向けてカラマツがすべての葉を落とすと大地は金色になります。春の芽吹きも夏の森もそれぞれ本当に素晴らしい。野鳥やキタキツネ、山野草などの動植物の宝庫でも



あるので、これからも貴重な遺産として保全して行ってほしいと思います」と語っていた。

防風林の中には台地から浸み出した水が沢山の川を作って根室湾に注ぎ、標津川、虫類川、当幌川等は鮭が湖上することで知られる。鮭の漁獲量が道屈指の標津町では標津川沿いに桜の木が幅約50m、延長1300m続く「桜つつみ」を造成し、標津サーモンパークやサケ・マス増殖蓄養施設を設置している。

根釧台地の格子状防風林はその防風効果と共に、森林と酪農地帯というこの地方特有の景観を生みだし、開拓の歴史や文化、産業を形成した。これが「北海道遺産」認定の要因になっており、この宝物を国と地域、市民が協働・協調して未来へ継承していこうという活動が行われている。

その一つとして森林管理署と町、森林組合では、根釧台地の豊かな森林に親しみ、森を守り育てる市民活動を推進するため、植樹祭、森林浴ツアー、森林公開講座、子ども植樹博士認定会等のイベントを開催している。

文／浅井登美子 写真／満田美樹



■北の大地に夢を拓いた「北海道遺産」②

稚泊航路時代の歴史を刻む 稚内港北防波堤ドーム (北海道稚内市)

稚内港と樺太大泊を運航した稚泊航路

は大正12年から昭和20年8月に航路が廃止されるまでの22年間に284万人の乗客を運んだ。防波堤ドームは強風と高波から乗客を守るために昭和6年から11年までの5年間かけて建設されたモダンな建物で、設計者は26歳の若き技師。古代ローマ建築を想わせる太い円柱と曲線美の総延長427m、柱の数70本ある回廊は内外の建築家からも注目され、稚内港のシンボリック建造物になっている。

●樺太が日本領土として 賑わった頃

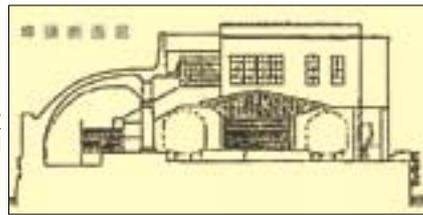
樺太は本来アイヌやニヴヒ（ギリヤーク）、ウイльта（オロツコ）民族が住む土地だったが、日露戦争が終わった明治38年から終戦の昭和20年8月までの40年間は日本領土となっていた。日露戦争勝利に湧く日本では早速小樽から樺太へ向かう航路が開かれたが、400kmあるため丸一日かかり、シケでダイヤが乱れることもしばしば。そのため稚内からの航路を望む声が高まり、大正12年5月に樺太大泊から来た汽船・壹岐丸が入港したのを契機に稚内からの

航路がはじまった。

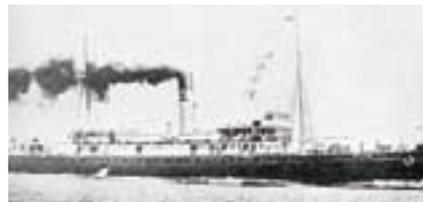
稚内から大泊までは約140km、所要時間は夏季が8時間、冬季が9時間で、当時は南稚内駅から乗降場まで1.6kmを歩き、さらにはしげ船に乗って本船まで行くため隔日運航だった。大正時代になると稚内港駅（現・稚内駅）と棧橋駅が開通したため利便性が大きく向上、築港工事も本格化した。港の整備に合わせて船も大型化し、昭和に入ると一日に1500人、貨物も1057tを輸送するまでになった。

しかし稚内港は日本海とオホーツク海がぶつかる場所で、四季を通して強風と高波に悩まされた。当時完成した5.5mの防波堤も高波は易々と越えて乗船客を襲ったこともあったという。そこで強風や高波の心配がなく乗船場まで安心して行ける新たなドームの建設が求められ、若き設計者が防波堤ドームの建築に当たった。昭和13年には列車を降りた客は岸壁から直接乗船できるようになった。

しかし昭和20年8月敗戦「海の動脈」として賑わっていた稚泊航路が突如終わりを告げることになる。当時南樺太には42万人もの日本人（強制連行の朝鮮人含む）が暮らしていた。国境を接するソ連との襲撃に脅えていた。20年8月9日にはソ連の対日宣戦で南樺太にはソ連軍がなだれ込んできた。そのため樺太



駅舎もある北防波堤ドームの断面図



稚泊航路運航当時に就航した若岐丸



ドーム内部は棧橋駅のホームや道路となっていた

湾に停泊していた宗谷丸は緊急避難民輸送を開始し、15日の終戦後も輸送を続けたが、避難民の数は日を追って増え続け、23日には定員の6倍近い4700人を乗せて早朝の稚内港に到着したという。「横8列に並んだ人々が3キロ以上の列を作っていた。これが宗谷海峡を渡る最後の船、一人でも多く乗船させたかったが、船の中は足の踏み場もないほどで、心を鬼にしてタラップをはずした」と後に福井船長は語っている。

同27日には稚内港棧橋に稚泊航路終焉を告げる連絡が入った。「ナミダ、ナミダ、ナミダ。」と打電してきたあと信号はぷつりと途絶えたという。(「稚内史」より)

現在は小樽・稚内港からロシア船による定期フェリーが就航、実に54年ぶりに平成11年からは日本船籍「アインス宗谷」も就航を始めている。

● 若き建築家の挑戦

日本最北端の重要湾港を担う稚内港。その歴史的シンボルになっている北防波堤ドームは5年に及ぶ悪戦工事の末昭和11年に完成し

た。13年にはドームに隣接した駅舎には急行列車が滑り込み、階段を上ると広い待合室、女性専用室、日本食堂1号店もあるモダンな施設も出来、人々は列車を降りドームを通って船に乗船できるようになった。

このドームを設計したのは稚内築港事務所に赴任してきたばかりの土谷実(26)だった。昭和6年1月末のこと。土谷は所長から突然樺太航路を高波から護るための岸壁を設計し4月から工事着手を行うように命令された。当時はコンクリートが建築土木用に普及されはじめたばかりで、技術資料もない時代。土谷は北海道大学工学部の第1期生で、卒論が『コンクリートアーチ橋梁の設計』だったことから上司は彼に期待したのである。

北大を卒業して3年目、道庁の技師として赴任してきたばかりの土谷は愕然、驚いて母校の教授を訪ねたものの目標は見えず、落ち込んで稚内に帰り、鉛筆でスケッチしたのが今日の北防波堤ドームの原型だったという。後に「大学時代に先輩から見せてもらった古代ギリシャ神殿の写真が潜在意識にあったと思う」と土谷が語っているように、高さ13mの半ドーム型防波壁をエンタシス状柱列72本が支え、アーチ型の回廊が424m続く。

当時は設計者が作業員を雇って工事に立ち会うのが普通で、土谷も図面描きから強度計算まで一人でを行い、工事現場の指揮に当たったという。構造的にも完べきな斬新なデザイン



は、既成概念に囚われない若い青年の自由な発想と、それを支えた工事関係者の協力によるものと専門家も高く評価している。

戦後は航路の廃止から棧橋駅はなくなり、ドームも波浪に耐えていたが、市では昭和53年から3年かけて大改修を行った。稚内港は礼文島、利尻島を結ぶフェリーやサハリン・コルサコフとの交流航路、北方漁業基地となっている。

現在北防波堤ドームは、ライダーたちの交流や市民のイベント会場として活用され、特に「稚内のみなどを考える女性ネットワークの会」では毎夏ドームで市民コンサートを開催し、観光客にも人気を博している。



▲上／船の揚げ降ろしもすべて人力で行なった
 下／ニシン漁の出稼仕事を終えて本州へ帰っていく漁夫たち
 ▶港に帰ってきた和船からニシンの浜揚げ作業



■北の大地に夢を拓いた「北海道遺産」③

ニシン漁で湧いた男たちの夢舞台 佐賀家ニシン番屋 (北海道留萌市)

日本海に面した留萌市礼受地区前浜には113年間ニシン漁を続けた佐賀家漁場が当時のままの姿で残っている。漁夫と親方たちが共に生活した番屋、ニシンを貯蔵したり加工した蔵、漁に使われた

数々の用具、船と船大工の技、裏手の山には稲荷社もある貴重な文化財(国指定史跡)。ニシンは消え、出稼ぎ男衆も去って久しいが、扉を開けると当時の賑わいが時を超えて聞こえてくるようだ。

●漁業全体が重要文化財

留萌市は北海道日本海側のほぼ中央部にあり、留萌川河口にある港湾都市として発展してきた。札幌、旭川から高速道路があり、交通便も良い。

ニシン漁で栄えた佐賀家の漁場は市海岸部の最南にあり隣の増毛町に接している。国道231号線を南西方向に約4km行くと海岸際のなだらかな斜面に佐賀家の漁場があり、目の前にはニシンが産卵のため押し寄せた海が広がっている。10年前に45年ぶりにニシンの群がここ

前浜に押し寄せて大騒ぎになったというが、今は魚影もなく船着き場に残る杭に静かに波が打ち寄せている。

佐賀家漁場の敷地総面積は約1万5千㎡。

中央に漁場の本拠である番屋があり、広い庭(身欠ニシンの干場だった)を挟んでトタン蔵。その奥に船を保管する船蔵、道路の西側には漁期に一時的にニシンを収納する「廊下」と呼ばれる建物があり、廊下の南西にはニシンを炊いた釜跡や船着き場が残っている。船蔵の裏手にはJR留萌本線が走り、その先に網蔵があり、裏手は急峻な山。その山

には稲荷社を建て、大漁と安全を祈願した。番屋の左隣には小川が流れ、奥にも数個の蔵があったというが、今は取り壊され住宅になっている。また海辺に建つ廊下は平成16年の台風で倒壊したため市で復元し、海へ出る機会のないなかつた大型船2艇を収



◀佐賀家の漁場。手前左が廊下、道路上中央が番屋、右手がトタン蔵、奥に船蔵、網蔵がある(留萌市提供)



▲昭和32年まで百年間使われた番屋。右側が親方の居間と事務所、左が漁夫の部屋
▼上/明治36年に建造したトタン蔵。扉には因(カクダイ)の屋号
下/船の舳先を外に出して収納した船蔵



▲番屋内部。漁夫たちの宿泊場所で、コの字型になっている



▲トタン蔵にあった大鍋。ニシンを煮て乾燥させる



▲番屋奥にある厨房と食事処



▲古材を生かして建てた船蔵の内部。漁が終わると船は手入れして収納した



▲廊下の中に収納している和船。昭和29年に建造したもので漁に出すじまいった

納し、青少年らの見学会に役立てているという。

日本海沿いの町には「ニシン御殿」という建物が幾つか残っている。その多くが明治後半になって建造した豪華な屋敷や番屋だが、留萌市の「佐賀家ニシン番屋」は江戸時代から昭和中期までニシン漁を行ってきた人々の生活と漁特有の技や加工技術を今に留める大変貴重なもの。平成7年には「留萌の鯨漁撈(旧佐賀家漁場)用具」3745点が重要有形民俗文化財に、9年には番屋他6棟に及ぶ付属屋を含めた佐賀家漁場全体が国の史跡に指定された。同時に市では教育委員会や郷土史研究家、外部の専門家による調査会を発足し、それらを図録、写真を加えて丁寧な報告書にまとめている。

案内してくれた教育委員会の学芸員・高橋勝也さんは美大を卒業した特技を生かして、図面やイラスト描きをし、以来文化財の調査・保護活動の担当係を担っている。

●佐賀家のニシン漁場経営 113年の歩み

北海道のニシンはアイヌの人たちが「カムイチップ(神の魚)」と呼んで鮭と同様に重要な食料として食していたが、タモ網による小規模漁法だった。和人による本格的なニシン漁は江戸初期に松前藩が領内に限って行ったが、一般漁民は厳禁されていた。しかし領内だけでは不漁となり蝦夷地の人口も増加の一途だったことから、西蝦夷地へ進出する漁師が後を絶たなかった。そのため天保11年(1840)には雄冬岬以北のニシン漁も解



▲左／ニシンの種類も大小さまざま。小さいニシンは粕に加工した用具を多数使い、浸水しない精度の高い船を造った 右／船大工は専用の特殊な

▲留萌市「海のふるさと館」に展示してあるニシン漁用具。中央が網類、その右にはニシンを運搬した背負箱等が並び

禁され、留萌にもニシン漁民が入ってくるようになった。

留萌への最初の出稼ぎ漁民が佐賀平之丞で、弘化元年（1844）現在の礼受地区に漁場を開いた。佐賀家の先祖は九州佐賀の武士で、大阪城落城で北へ逃れ、下北風間浦村下風呂で漁業海運業を営んできたという。

蝦夷地と往来し始めたのは五代平之丞の頃で、南部藩御用達となって松前、函館、新潟を往来して商売を始めた。

本格的に留萌に漁場を開いてニシン漁に乗り出したのは七代目清右衛門で、八代目平之丞を礼受に赴かせニシン漁を始めた。ニシン漁は春期間だけであるため、漁が終わると漁夫は故郷へ帰って行った。

当時（安政年間）は3軒の出稼家があり、合わせて男85人が働き、ニシン漁獲高は1700石だったが、数年後には1万3160石と増えていく。その中で佐

賀家は建網5統、箆網2統を経営し、出稼漁業者の中では傑出した存在だった。その後も佐賀家は順調に発展し、明治20年頃までには7〜8統の漁場を経営していた。

しかし漁獲高は毎年激しく変動しており、ニシン漁は不安定であった。そのためリスクを少しでも軽減するため、明治35年以降は定置漁業の権利を賃貸又は現物納めで貸すことで経営を安定させた。昭和に入ると不漁はさらに深刻になり、最盛期の明治36年には3153石あった漁獲高は昭和7年には131石、0の年もあり、昭和33年に操業を断念した。しかし終了後も漁場をそのまま残し、管理人を置きながら、番屋や付属建物、用具、経営関係文書を保管してきた。

これらの代表的な用具等は市内の「留萌市海のふるさと館」に展示され、当時の隆盛を忍ぶとともに、網、船大工道具、運搬用背負箱等も展示。ニシン漁における様々な工夫と技術の高さに驚かされる。特に船大工が使った用具は、キリ・カンナだけでも各数10種あり、いかに繊細で高水準の技が駆使されたかに驚嘆する。

●「若い衆」と親方たちが共同生活

100年に亘って使われた番屋は三回は大きく改装したと専門家は見ている。玄関を入ると広い土間があり、左手は漁夫「若い衆」たちの寝室で、右手が親方らの居住部、土間の奥が厨房・食事処になっている。2段になる漁夫の寝室は畳敷きで雑魚寝使用、ここからは海がよく見える。親方や役付漁夫が住む部分は昭和になって大改装したようで、応接



▶市内中心部にある「海のふるさと館」(上)と資料の整理に励む高橋学芸員
▼現在、数軒の漁師が漁業を続ける礼受漁港



室や仏間もあり、今でも快適に住めそうだ。厨房には竈が三基あり大鍋が置いてある。食料の乏しい時代でも、ここは一日4食、男たちの旺盛な食欲を満たしてくれたのだろう。

トタン蔵は屋号の因（カクダイ）を付け、貴重だったトタンを壁にも張った蔵で、内部は板張りの二階建。ニシンを選別して茹で粉砕した製品を収納していた場所、ニシンは鮮魚、身欠ニシン、数の子として食用に使う以外は、大部分が粕にして高級肥料として関西方面に出荷された。

廊下は一時的にニシンを収容する蔵で、出し入れしやすいように壁板が外せるように作られ、船の収納にも使われた。船の収容では斜面奥に平屋建て船蔵があるが、外壁から船の舳先を出すなど、使い勝手に数々の工夫が見られる。いずれも漁業状況に応じて改装しながら愛着をもって使用してきた先人たちの知恵と心意気が溢れている。

文／浅井登美子 写真／満田美樹



新時代を先取りした
近代化施設①

厳しい大自然に凜として立ち向かう 尻屋埼灯台と寒立馬かんたちめ （青森県東通村） ひがしとうちむら

本州最東北端にある下北半島尻屋岬に建つ白亜の灯台。岬の晩秋の穏やかな草原では寒立馬たちが三々五々に草を食み、北欧の美しい絵八ガキを見るような風景だ。しかし午後4時半頃には日は落ちて冷たい海風が吹きはじめ、岬は無人になる。午後5時灯台の塔頂部のライトが回転し始め、やがて点火して暗黒の太平洋を照らし始めた。そんな中で馬たちは波打ち際にも下りてひたすら草を食べ続けている。しばらくの厳冬のいま、凜と大自然に立ち向かっているであろう寒立馬と灯台のことが脳裏を離れない。

▶上／灯台の建物はレンガを分厚く積み上げている 下／今は無人で封鎖された窓
▼灯台近くで草を食む寒立馬の親子



▲レンガ造りでは日本最高の高さを持つ尻屋埼灯台



▲午後5時に灯台が点火した、晩秋の尻屋岬

高さも光度も我が国最大級——尻屋埼灯台

東通村は下北半島東部にあり、村制以来隣接するむつ市に役場庁舎を置いた全国でも珍しい村だったが、昭和63年の村制100年を機に村中心部に役場庁舎を建設した。庁舎と並んで交流センター、体育館もあり、四角、三角、丸い形で構成されたこれらの建物はユニークで、観光客も訪れるほど。

観光メッカといえば尻屋岬の灯台と寒立馬^{かんだちめ}。青い海と緑の草原、その先端に立つて難所といわれる海を照らし続けてきた白い灯台と、草原に生息する野生馬「寒立馬」は、自然の豊かさや厳しさの中で耐えて生きることの意味と感動を私たちに与えてくれる。

灯台は、徳川幕府が慶応2年に英、米、仏、蘭の4カ国と締結した江戸条約で設置が義務づけられたもので、明治新政府になると建設事業が始まった。明治元年に来日した英国技師リチャード・ヘンリー・ブラントンの手で国内に26基の灯台が建設され、その最後の仕事として明治9年に尻屋埼灯台が建設された。

発電を採用した先進的灯台でもあった。

尻屋崎の海は東は太平洋、北は津軽海峡に臨み、冬の防風雪は強烈で、昔から難破海と言われる航海船の難所だった。当初からこれを考慮して建設したブラントンの技術力と、この灯台を守り続け、125年経ち無人になったいまも数分の狂いもなく海を照らしている関係者の仕事ぶりにも驚嘆する。

しかし一度だけ尻屋埼灯台の灯が消えたことがあったという。終戦間近の昭和20年7月、尻屋埼灯台は米軍機の爆撃を受けて塔室は破損、その時灯台守の一人が機銃掃射を受けて殉死したのである。しかし破壊したはずの灯台が何度か灯を点しているのが漁船や地域の人に確認された。灯台を管理している海上保安庁では、尻屋崎の光は命がけて灯台を守ろうとした灯台守の「守灯精神」が点したのだという話が語り継がれているという。

事実、我々は撮影用に特別に許可をもらってゲート内に入り、暮れていく海や草原に灯

建物はレンガを何層にも組んで積み上げ外側を白いペンキで塗り上げたもので、塔頂部までは32.8m、レンガで造られた灯台では日本最高の高さを持つ。明るさ(光度)も53万カンテラと我が国最大級で、光遠距離は34kmに達する。レンズの大きさは大人の身長よりも大きいという。さらに、当初は石油灯で点灯していたが、明治34年には電気式灯台になり、日本初の自家

大人の身長よりも大きいレンズがぐるぐる回りはじめる



岬中央部に設けられた休憩所。ここでは車より寒立馬が優先する



草原の哲学者——寒立馬

尻屋岬には現在約30頭の野生馬「寒立馬」かんだちめが棲息している。岬は内陸部には低木が茂っているものの、海に面した丘は樹木一つない草原地帯。中央部を一本の道路が走り、観光客の車で賑わうが、馬たちは道路にも堂々と立っている。人に決して媚びずマイペースである馬は眠っている如く夢想し、ある馬はひたすら道路脇の草を食べている。岬の気象や自然情況、観光客動向もすべて把握しながら孤立無援、野生に生きる姿は威厳ある哲学者のよう。思わず「何を考えているの」と聞いてしまうが、馬たちは微動だにしない。

寒立馬の生い立ちは、下北地方に棲息していた比較的小ぶりで寒さと粗食に耐える田名部馬と呼ばれる馬にさかのぼる。田名部馬は幕政時代から明治・大正・昭和時代に南部馬を基に外来種馬と交配して軍用を目的に改良されてきたが、さらにフランスのブルトン種と掛け合わせて現在のような力強く寒さや粗食に耐える独自の馬種に成長した。南部馬の血を受け継ぐのはこの東通村の寒立馬だけと言われており、尻屋岬の風土の中で培われた生命の遺産的存在でもある。

地元の人々はこの馬を「野放し馬」と呼んで特定の名前がなかったが、昭和45年に当時尻屋小中学校の校長をしていた岩佐勉氏が「しのぶ東雲に勇みいなく寒立馬 筑紫ヶ原の嵐ものかは」と詠んだこ

とから「寒立馬」と呼ばれるようになった。寒立という言葉は、マタギが厳寒の中に何日もじっとたたずむカモシカをそう呼んでいたそう、寒立馬が吹雪の中でじっと耐えて立つ姿は新聞等にも紹介され、人々に驚嘆と感動を与えている。

しかし平成9年には9頭までに減り絶滅の危機に達したことから、村と県では寒立馬の保護保存活動を始め、厳寒期には半島の内陸部に誘導して多少の飼料を与えるようにしている。14年11月には「寒立馬とその生息地」が青森県の天然記念物指定を受けた。とはいっても、仔馬たちが無事育ち繁殖していけるようにと願う人々のボランティア活動で支えているため、現在寒立馬保護募金実行委員会が設置され、「寒立馬保護基金」を募っている。なお、太平洋岸に面した猿ヶ森砂丘には、2500年前にヒバ林が海から吹きあげた大量の砂で木々が立ち枯れたという「ヒバ埋没林」があり、今も木々が茂る森の中に立ち枯れたヒバを数本見ることができる。

文／浅井登美子 写真／小林恵

草原でじっと夢想する寒立馬は哲学者のよう

●東通村商工振興グループ ☎0175-27-2111
「寒立馬保護基金」は郵便局振替口座02350-7-2027



- ▶石造りアーチダムの池と堰堤、バルブ室
- ▼バルブ室内部。池には錦鯉がゆったり泳いでいた



軍港に水を供給した精巧な石造りダム 旧大湊水源地堰堤 (青森県むつ市)

むつ市旧市街地の一角にある水源地公園はサクラの名所で、松、楓、ヒバ等の古木が茂る手入れの行きとどいた美しい公園。その中心に設置されているのが旧海軍大湊要港部水源地堰堤と呼ばれる水道施設。宇田川より取水して、ろ過したものゝを池に溜め、石をアーチ型に組んだダムから緩やかに流して、市民や軍への飲用水、軍艦用水として供給してきた。石造りアーチダムとしては日本最古、東北地方で最初に建設された近代水道施設で、昭和51年まで市民に水を供給してきた。小規模だが、精巧な設計、技術水準の高さ、デザイン性、美しい水流が目される。

近代水道施設として国重要文化財に

むつ市大湊には現在も海上自衛隊の基地があるが、明治時代から海軍の要港として発展してきた。明治35年に開庁した大湊水雷団の艦船に補給用水を確保するため、水路施設の建設が急務となり、明治34年より第一引入口の工事に着手、続いて沈澄池堤防、用水路等を連続的に建設した。

設計は横須賀鎮守府経理課建築科の長井川揆喜蔵で、後任の建設課長は櫻井小太郎。後に旧丸ビルや三菱銀行本店を設計した人で、堰堤楕円形アーチの見事な設計は櫻井の手によるものと言われている。

第一引入口建設では、宇田川の中流域に一

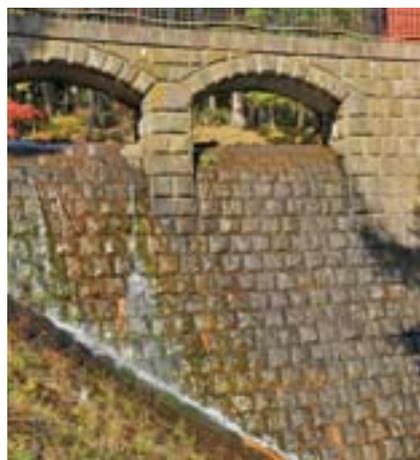
辺3mの桁型石組み構造物を造り、東側に堰堤、南側に通水溜、溢水口、余水路が築かれている。水は通水路から貯水池に送る一方で、余水は溢水口から余水路を通過して宇田川に放流された。

沈澄池は川に含まれる土砂を沈殿して上澄みを乙水槽(バルブ室)に送水するもので、堤長27.6m、

堤高9m、堤頂幅1.57mのアーチ式石造り。41年に着工し43年に竣工した。

乙水槽は、外側は木造正八角形の建物だが、内径2.5m、深さ3.9mの円筒型の煉瓦造りで、ここで水量と給排水を調整した。明治後期にこのような技術水準の高い近代水道施設が造られたことは驚くべきことで、平成21年10月に国の重要文化財に指定された。

しかし現在、公園の真ん中を横切る形で新道路が開設されている。市街地の幹線道路が狭いため新道路の開設が長年求められ、やむなく公園の上を橋で繋ぐようにしたという。橋の上から池や堰堤の景観を見ることができるようになったが、通過車両が多くなると、この貴重な文化財施設や植物に影響がでるのではないかと心配でもある。



堰堤の上を歩ける道があり、中央にバルブ室がある

- むつ市教育委員会 ☎0175-22-1111
- 水源地公園管理事務所 ☎0175-24-1818

新時代を先取りした
近代化施設②

水力発電事業黎明期の気概を伝える 読書発電所・桃介橋

(長野県南木曾町)
なぎそまち



▲木曾川のほとりに建つ読書発電所。鉄筋コンクリート造りのレンガ壁、半円形の飾り窓を配した優雅な雰囲気をもつ

南木曾町は、面積の94%を森林が占める山深い地域である。現在は、町の中心を大きく蛇行する木曾川沿いに、国道19号と中央本線が走っているが、かつてのにぎわいは、森林を分け入るように造られた旧中山道にあった。江戸時代のたたずまいをそのままに残す妻籠宿には、時空を超えて守られてきた景観を慕い、多くの観光客が訪れている。一方で、町には燦然たる近代的な足跡も残されている。大正12年の竣工以来、今も現役で使用されている「読書発電所」「柿其水路橋」、そして「桃介橋」である。

小雪ちらつく冬の一日、江戸時代の名残をとどめる町に息づく近代化遺産を訪ねた。



▲操業当時のまま、現在も使用されている水槽と水圧鉄管。落差112m。水槽には正面、側面部分に建設当時のデザインが残されている



▲読書発電所紀功碑。古谷さんと早川さん(右)。「上部の扁額は、桃介の言葉と文字です。『流水有方能出世』。流水は、方法によって電気にすることができ、世の中の文明を開くことができる」という意味です」



▲天井高18mの発電所内部。無機質な発電機器に、半円の窓や明かり取りから優しい光が差し込む
▶江戸時代にタイムスリップしたような妻籠宿。国重要伝統的建造物群保存地域指定

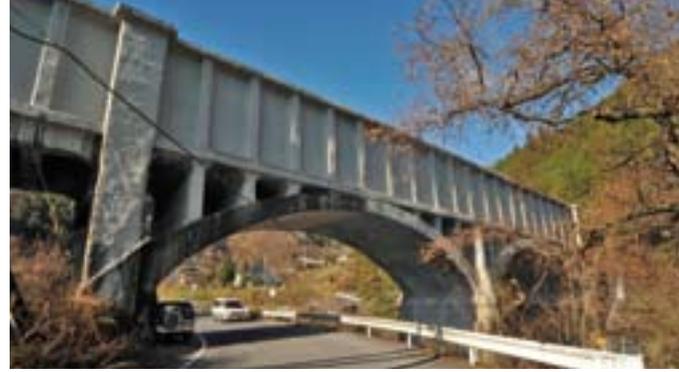
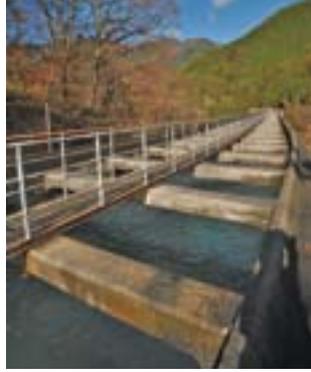
2年の年月と延べ170万人以上の労働力を投じて建設された読書発電所は、現在、遠隔操作で稼働しており、通常は無人である。見学にあたって、関西電力東海支社広報の古谷清司さんと同社木曾電力システムセンターの早川雅人さんに案内していただいた。

「この発電所の建物には、当時流行だったア
「よ(与)・み(三)・かき(柿)」に由来している。
妻籠宿に近い木曾川のほとり。「読書発電所」の白亜のレトロな建物と山肌
この大きな水管が望める。「読書」は「よ
みかき」と読む。明治7年、この地域の
与川、三留野、柿其の3村が統合された
とき、各村名の頭の文字をとってつけた
2年の年月と延べ170万人以上の労働力を
投じて建設された読書発電所は、現在、遠
隔操作で稼働しており、通常は無人である。
見学にあたって、関西電力東海支社広報の古
谷清司さんと同社木曾電力システムセンター
の早川雅人さんに案内していただいた。

自然とよく調和した発電所



▶柿其水路橋（国重要文化財）。全長142.2m。現存する戦前の水路橋の中では最大級の規模を誇る。左は上から水路橋を望む。大量の木曾川の水を取り込む



曾川の自然の中に溶け込む建築物を目指したのだと思います」と古谷さん。
 建物の地下に下りる。外観の優雅さと一変して、話も聞き取れないほどの轟音が響き渡る。1秒間に45トンの水を水車に送り込み、電氣をつくりだす音だ。水車室には、当時の米国の電力企業「WESTING HOUSE」社の文字が刻されている。現在の稼働率は全体の3、4割とのことだが、轟音は、現役の近代化遺産の吐く気炎とも聞かれる。
 建物を出ると、目の前に黒々とした巨大な

ール・デコ様式が採り入れられています。木曾川には大正6年からの9年間で7つの発電所が造られました。その建物のデザインがすべて違うんですよ。レンガ造り、鉄筋コンクリート造りなど建材・工法が違うだけでなく、ゴシック風、昔の女学校の寄宿舎風と、どれ一つとして同じデザインがない。ともすれば無機質になりがちな産業施設が、風景の中の自然物のような調和を奏でている。
 これらの発電所建設に取り組んだのが福沢桃介。福沢諭吉の娘婿である。「桃介は、木

水圧鉄管が迫ってきた。中腹まで登れば水槽も望める。「施設周辺は、紅葉がたいへん美しいんですよ。桃介の家紋が紅葉ですから、植栽したのかもしれないね」。
 行き届いた発電所周辺の風景に、桃介の思想が今も継承されていることを実感した。

電力王・福沢桃介と女優・川上貞奴

福沢桃介は、明治元年、埼玉の農家に生まれた。慶應義塾在学中、福沢諭吉に見込まれ、諭吉の娘ふさと結婚。明治20年に渡米し、実業の道を歩み始める。帰国後、北海道の鉄道会社に就職するが、肺結核の療養中に始めた株で巨万の富を得、大同電力を設立、木曾川での電源開発事業に乗り出し、日本の電力事業の礎を築いた。

読書発電所から木曾川上流を2 kmほど上った場所に、桃介が発電所建設の拠点とした「大洞山荘」がある。現在は記念館として公開されており、発電所からはウォーキングコースで結ばれている。

地元に住む西尾典子さんが館内を案内してくれた。階段の柱に橋の欄干だった部材を利用するなど、あちこちに廃材を使っているが、けっして粗末でなく、床しい設計センスが匂い立ってくる。

「ここには桃介の写真や遺品、資料の展示だけでなく、川上貞奴の資料も展示されています」と西尾さん。

川上貞奴は明治・大正の一世を風靡した女優。女優引退後、桃介の事業を手助けした。「貞奴は世界的にも名を知られ、政治家とのつながりも深い女優でしたから、桃介の事業

を側面から支える重要なパートナーだったと思います」。

このとき、桃介と貞奴は50代。互いに信頼しあいながら大人の恋を育んだ2人を、この洋館は見守り続けたのだろう。
 「桃介の業績が歴史の表舞台に出てこないのはさびしい」と西尾さん。

それでも、遠方から桃介の熱烈なファンが



▲木曾御嶽山登山の記念写真（福沢桃介記念館展示）
 前列左から4人目が福沢桃介、隣の女性が貞奴



▲大正11年9月の桃介橋渡り初め。パナマ帽の桃介、黒留袖の貞奴の姿が（福沢桃介記念館展示）



◀左／資料館内部。福沢桃介や川上貞奴の遺品や資料が展示されている
 中／展示物を前に説明する西尾さん
 右／記念館外観。大正時代の貴重な西洋風別荘建築としても知られる

訪ねてくる。

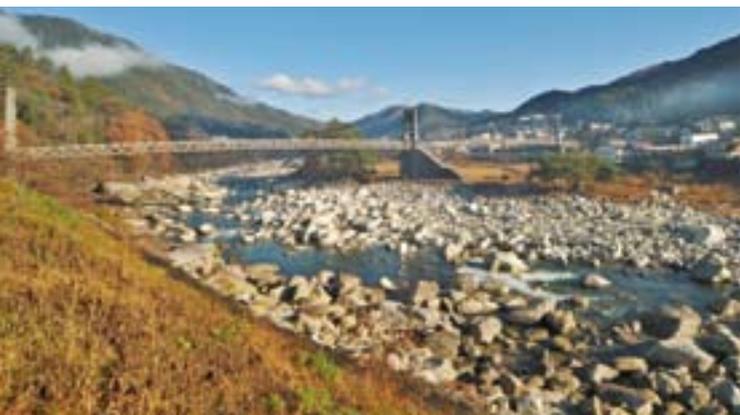
地域住民が守り抜いた桃介橋

記念館から木曾川の上流を望むと、姿のいい洋式の橋が見えた。大正11年に、読書発電所建設の資材運搬路として桃介が造った「桃介橋」である。当時の日本の土木技術の粋を集めて造られ、全長247m、幅員2.7mの規模は、木製補剛トラスをもった吊り橋として、日本最古かつ最大である。

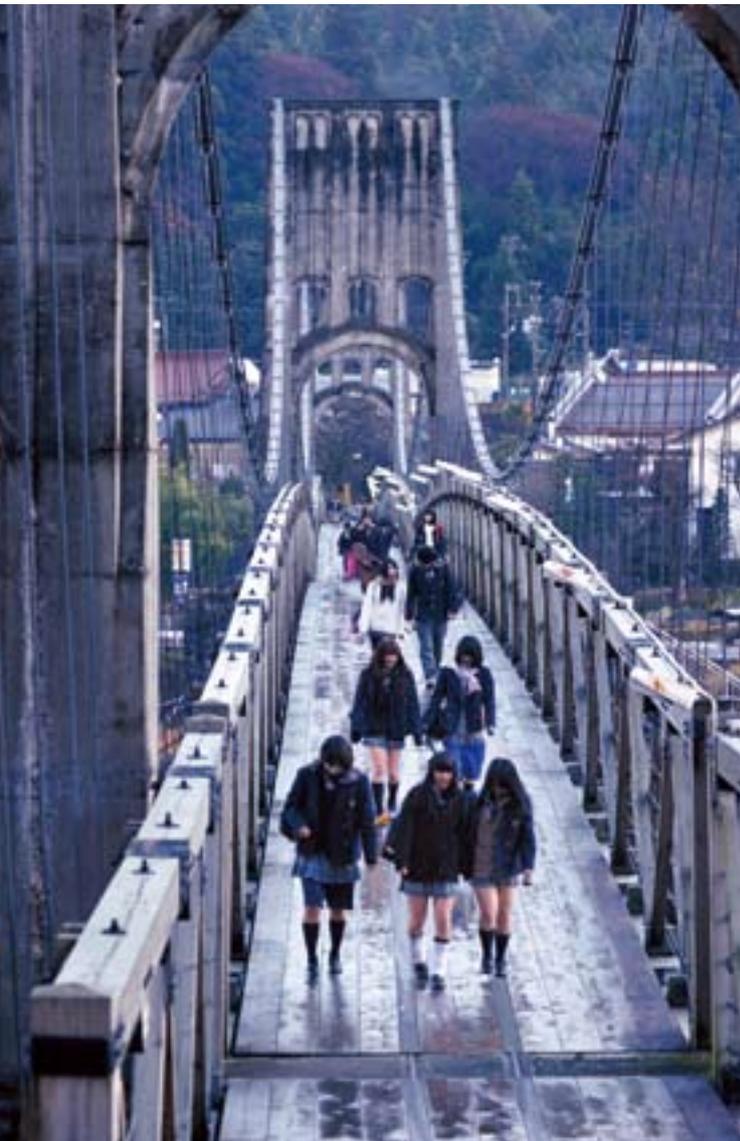
橋に優雅なラインを与えるため、川幅の一番広い部分に、あえて斜めに通して設計された。資材運搬専用の橋にこれほどのデザインを施すとは、欧米文化を吸収してきた桃介の奇抜さと美的センスを感じる。

桃介橋は、昭和25年に村道（現在町道）となり、生活道路として利用されていたが、老朽化により、昭和53年以降は

通行禁止とされ、60年代には撤去が検討される事態となった。そのとき、橋の保存、復元運動に乗り出したのが、地元「桃介会」のメンバーだった。桃介橋のもとにある「喫茶ピエロ」のオーナー北澤義孝さんもメンバーの一人である。桃介会は、三留野地区の地域振興を考える十数人の集まりである。町議会で橋の撤去が決定に傾く状況下、保存の署名活動を始め、復元のための設計図を描き、陳情を重ねた。皆、昔のように橋を渡りたい



▲木曾川上に端麗な姿を見せる桃介橋。中州にコンクリートの支柱をたてワイヤーロープを張って吊っている
▼桃介橋を渡って通学する高校生たち



という一心だった。結果、平成5年に復元工事が実施され、翌6年には読書発電所、柿其水路橋とともに国の重要文化財に指定された。

その後もボランティアで橋周辺を整備し、平成10年には、周辺地域の有志により、桃介橋河川公園組合を設立。公園の植栽や整備、桃介記念館の運営・管理、河川の清掃活動を町から委託された。現在会員は51名を数える。「行政の手に任せず、地元に住む私たちの手でまちをきれいにしていきたいという気持ちです」と組合理事山崎隆三さん。

一昨年の春には、記念館に隣接する木造2階建ての遊休施設を利用し、飲食施設「桃介亭」をオープンした。今後は、橋のライトアップを計画している。「文化財なので、いろいろと制限があるけれど、橋を見にきてくれた人たちが気持ちよく過ごしてくれればいい

ね」と北澤さん。桃介橋が地域のシンボルとして生きていくことを改めて感じた。

翌朝、再び桃介橋に出かけた。南木曾駅に電車が到着してしばらくすると、橋上に人影が現れた。桃介橋の先、木曾川西岸の丘に建つ県立蘇南高校の生徒たちである。彼らは毎日、桃介橋を渡って学舎に通う。桃介橋を渡って「学業」へとつなぐ桃介橋を、福沢桃介は天上でどんな思いで眺めているのか。橋を渡る高校生たちの輝く笑顔と、記念館で目にした桃介の肖像が重なった。

文／村上憲加 写真／小林恵

▼桃介橋とその周辺の整備に力を注ぐ桃介橋河川公園組合の松瀬さん、北澤さん、麦島さん、山崎さん(喫茶ピエロで)、店から眺める桃介橋は最高





▲緩やかな曲線を描く埠頭



▲港と山裾の間の環濠。石積堤防に置かれた植木鉢



▲三角西港埠頭、東側排水路の出口で

石炭や物資を輸出する特別貿易港 三角西港の石積埠頭 (熊本県宇城市)

灰色の大きな矩形石が、繊細な図形のように敷きつめられた熊本県宇城市三角西港埠頭。築港当時の姿を残す石積埠頭は、柔らかさと温かさを感じさせ、触れてみたくなる。

天草諸島と宇土半島に挟まれ外海の荒波から守られている三角西港は、宮城県の野蒜港と福井県の三国港と共に、明治政府が築港した日本産業の近代化を象徴する港の一つである。

明治政府がオランダ人水理工師に託して作るうとした港湾都市を訪ねると、近代日本を支えた巧みの技と明治時代の高揚した進取の気性が立ち上がってきた。

国費を使って突貫工事

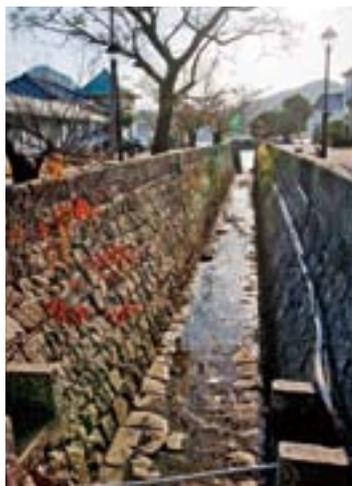
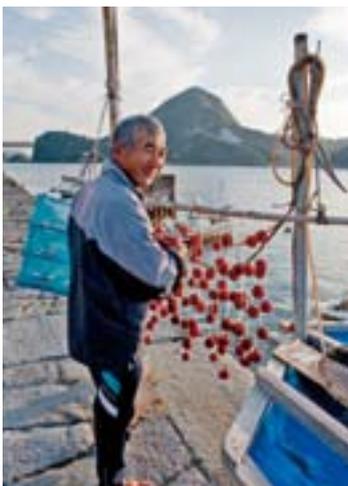
西南の役（明治10年／1877）で荒廃していた熊本県の産業を発展させるため、明治13年に、熊本県議会の白木為直議長らが当時の県知事富岡敬明に熊本港湾修築建言書を提出した。その計画は、細川藩の時代から熊本の本の必要物資を賄っていた百貫石港を改修し、経済向上を図るといったものであった。

富岡県知事は、この建言書の意義を認め、総工費30万円（現在の金額では約35億円）の予算を計上した上で、その中の10万円について国費補助を求めた。明治政府としても産業の近代化を急ぐため、三池炭鉱で産出される石炭や米、麦、硫黄などを輸出する貿易港が望まれていた時期である。

ただちに国費による建設が決定され、内務省から熊本へ派遣されたオランダ人水理工師ローエンホルスト・ムルドルは、当初の計画であった百貫石港を調査。しかし、この地は、熊本から10kmほど西の坪井川河口に位置するため、流出土砂が多く遠浅で水深が確保できず、築港には不向きであることを進言。その後の調査によつて宇土半島西端の三角が、水深が深く、自然の条件が整っていることから築港の代替地に選定された。

港湾工事は明治17年3月、40km離れた熊本と三角を結ぶ道路工事から着工され、5月には港湾工事も始まり、多くの労働者が投入された。

なかでも、熊本監獄の三角出張所が設けられ、囚人約300人を港湾工事に使役し、そのうち69人にも及ぶ犠牲者を出したことは、築港が難工事であったことと明治政府の性急ぶりが想像される。現在は、犠牲者を一カ所



◀右／繊細に石積した市内を流れる排水路。
左／埠頭では漁師さんが干し柿を楽しむ



▶宇城市世界遺産担当の松村浩一係長（右）と村上正明参事

に改葬し、^{げだつばか}解脱墓として近くの山中に弔われている。

天草の石工を始め、多くの労働者を集めて行われた三角西港築港工事は、着工からわずか3年後、驚異の速さで明治20年8月15日に開港を成し遂げた。

築港に使われた石は、対岸の大矢野島飛岳の近くから切り出された。45cm角で長さ約60cm×180cmの切石を、16段の高さまで積み上げた埠頭は、延長730mの緩やかな曲線を描いて南北に伸びている。

背後に迫る三角岳（標高406m）からの雨水を排出するため、環濠と水路2本が造られ、三角西港自体が石で囲われた街を形成している。この排水路は、100分の1の勾配があり、干満によって排水路に潮が満ち引きするため、自然の営みによって排水溝をきれいに保つ役割を果たしていた。

開港の前年には警察署、開港後は、長崎税関三角出張所、簡易裁判所、宇土郡役所のなど公的施設が建設されると共に、商店、旅館、回漕店倉庫なども作られて、三角西港は都市機能を充実させた。

明治政府の産業近代化の夢を実現するため築港された三角西港は、開港2年後に、米、麦、石炭、硫黄などの特別輸出品に指定され、その10年後には全ての貨物を取り扱える貿易港として発展していく。特に三池炭鉱の石炭を上海へ輸出する港として期待された三角西港だった。

重要貿易港の役割を終え：

しかし、急激な増産を重ねる三池炭鉱の石

炭を円滑に積み出すためには、目の前が有明海の瀬になっていて潮流が速く、使いづらい三角西港では間に合わず、地の利の良い口之津港が開発され、さらに三池港が築港されて、三角西港の役割は段々と薄れた。また、当初から計画されていた鉄道は、2kmほど離れた^{きわさき}際崎の地に駅が建設され、地形的に困難があった三角西港まで線路が延長されることはなかった。やがて港湾機能も鉄道駅近くの三角東港へ取って代わられ、三角西港の華やかな重要貿易港としての役割は急速に衰えた。

小春日和の夕刻、ムルドル水理工師の描いた三角西港湾都市を歩いた。中心地区は港湾遺跡を保存するための整備事業が進んでいる。小泉八雲が訪れて「バルコニーの杉のあいだから、海辺にそつてひろがるきれいな灰色の町が見渡せた。錨をおろした黄色い小舟の群が、眠っているようにのんびりと浮かび：」と、作品『夏の日の夢』で描いた旅館「浦島屋」を始め、荷役倉庫や旧高田回漕店などの復元が行われ、公園化が進められている。当時のまま現存する建築物は、現在九州海技学院として使われている宇土郡役所庁舎や旧簡易裁判所本館などがあり、多少の移築や改修はされているが、背後の高台で保存されている。

緩やかな弧を描く埠頭の石畳を歩くと、干物を作るための網が吊り下げられ、干し柿が潮風に当たっていた。漁から帰ってひと休みしたのか、漁師が干し柿を一つ一つ採んでいる。「もう甘かで一つ食べてみらん」と、真つ赤な干し柿を差し出してくれた。

三角西港埠頭、東西の排水路、排水路に架

かる3つの石橋が、平成14年に国の重要文化財の指定を受けた。平成21年には、九州・山口の近代化産業遺産群の一つとして、三角西港が世界遺産暫定リストに追加掲載された。アジアで当時の姿をそのまま残す港湾の近代化産業遺産は、三角西港だけだ。明治時代の進取の気性に触れ、我が国の底力となっている匠の技を再認識するためにも、今こそ、三角西港が世界遺産として評価されることを願って止まない。

写真&文／芥川仁

▲旧三角簡易裁判所本館と本館法廷。他に記録倉庫も現存



▲旧宇土郡役所庁舎の正面。現在宇城市立九州海技学院本館として活用。庁舎室内の天井（中）と廊下



●宇城市教育委員会文化課
世界遺産推進係
☎0964(32)1954



▲旧郡築新地甲号樋門俯瞰。黄色いオイルフェンスが張られている



▲▼旧郡築二番町樋門全景



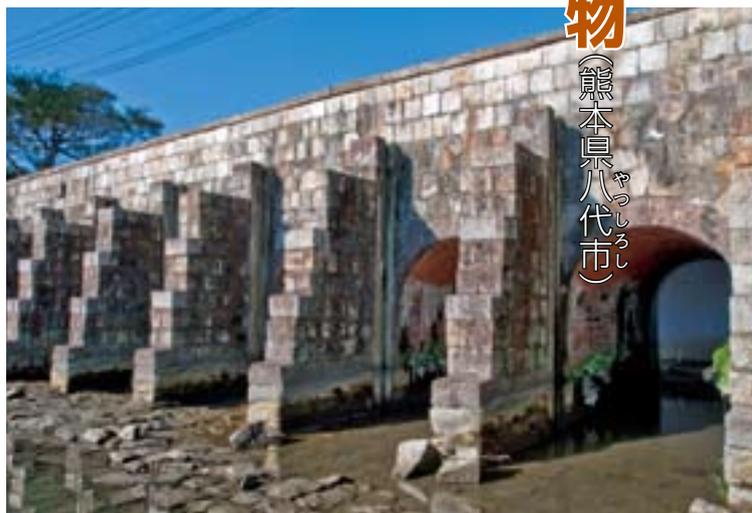
▲呑口の両側にある石積



▲呑口。内部に赤レンガが見える

西洋の新技术も導入して地域・産業を近代化 旧郡築新地樋門・市街地の文化財建造物

(熊本県八代市)



八代市八代港近くにある旧郡築新地樋門は、城門を想わせる洋風石造りアーチ式樋門で、堅牢で緻密な石積の技術に圧倒される。明治政府が郡制を施行したのを機に、郡有財産を殖やそうと郡事業として行った大規模な干拓事業。3つの樋門が建設され、完成した干拓地には300戸が入植して村を形成、現在も活気ある農業生産地になっている。

さらに市街地には江戸時代の名勝庭園、明治中頃に開設した修道院、古くから続く老舗温泉旅館等々の固有文化財指定の建造物、電力・鉄道等の施設が多数あり、西洋の文化や技術を取り入れながら産業の近代化に活かした八代の先人たちの進取の気性に溢れている。

干拓新地への夢を結実 旧郡築新地樋門

城門のような石造アーチ式10連樋門の旧郡築新地甲号樋門は、近くで見るとその力強い石の量感に圧倒される。右側の堤には栗の大きな木、左側の大木の下にはえびす様の小さな祠が祀られている。

横幅29m70cm、高さ5m50cm、厚み8m34cmの規模を持つ樋門は、砂岩切石で組まれ、呑口は、アーチ状の赤レンガ造りだ。

熊本県八代市八代港近くにある旧郡築新地甲号樋門は、平成16年に国の重要文化財に指定された。

明治政府が郡制を施行した明治29年、初代郡長辛島格は、八代郡の郡有財産を殖やすために明治時代になって初めての干拓を計画し、ただちに海面測量に着手。

しかし、八代郡会はずしもこの干拓計画に賛成というわけではなく、紛糾の後、明治31年ようやく海面埋め立て計画を可決している。

明治33年から潮受け築堤に着工したが、台風によって工事途中の築堤が大破したため、一旦は中断の危機に直面した。しかし、着工

前年に就任した八代郡長古城弥二郎は、それまでに40万円以上の工費を費やしていたにも関わらず、さらに40万円を投入して工事継続を決意。工事は再開され、旧郡築新地甲号樋門は、明治38年に完成した。

郡が事業主体の干拓なので「郡築」という地名の由来となっている。

この樋門は、熊本県

技師だった川口虎雄が設計し、甲(三番町)乙(七番町)丙(十一番町)の3つの樋門が設けられた。干拓面積は1046ha、総工事費89万5700円。完成した干拓地には、八代郡の他に天草、宇土、葦北、上下益城、球磨、菊池などの郡より300戸が入植。明治42年に村を形成し、郡築村と命名されている。

▶旧郡築新地甲号樋門。石を幾何学的に組んだ明治時代を代表する建造物として注目される

現在では、市街地に連続しているため区別はつかないが、延宝元年（1673）に干拓された高子原新地に隣接する本来の地先である。

江戸時代初期の名勝庭園「松浜軒」

建設された3つの樋門の内、当時の姿を残しているのは三番町の甲号樋門で、外観の石積は、明治時代の洋風建築の特徴を見ることができ、海面側の木製招き戸は全て失っているが、石造10連アーチ状樋門は全国にも例がなく、我が国を代表する明治時代最大級の干拓樋門だ。

旧郡築新地甲号樋門の海側には、南北約1kmに涉って潮受け堤防の石積が、当時の姿のまま残されている。石積堤防の上には新しく道路が造られ、ススキやセンダンなどの灌木が覆っているため分かりづらいが、新しい土地を求めた明治期の郡行政が干拓にかけた熱意を感じるには充分の規模である。

この干拓によって造り出された郡築新地には、105年間を経た現在も広々と田畑が広がり、ビニールハウスで栽培されたブロッコリーやキャベツ、トマトの出荷が盛んに行われていた。

旧郡築新地甲号樋門の海側には、南北約1kmに涉って潮受け堤防の石積が、当時の姿のまま残されている。石積堤防の上には新しく道路が造られ、ススキやセンダンなどの灌木が覆っているため分かりづらいが、新しい土地を求めた明治期の郡行政が干拓にかけた熱意を感じるには充分の規模である。

つた場所に、江戸時代初期の庭園景観を今日まで伝える庭園として国指定名勝となつている「松浜軒」がある。

松浜軒は、高子原干拓を築造した八代城主3代目松井直之が、母親のために建てた茶屋である。庭園は、球磨川の水を導水した池と築山があり、築山越しに雲仙を望むことができる雄大なものだ。春には桜やフジ、カキツバタ、ツツジが咲き、夏には5000本の肥後花ショウブやコウホネ、睡蓮が池を彩る。

八代の歴史を語るのに欠かせない松浜軒庭園は、手入れの行き届いた観光庭園として開放され、市街地の一角にあるとは思えない静寂さを保っている。茶屋のガラス板が映し出す庭園の姿は歪んで見え、ことさら歴史を感じさせた。

地域の人々と共に——
シャルトル聖パウロ修道院

松浜軒からほど近い所に、木造2階建て洋風建築の国登録有形文化財であるシャルトル聖パウロ修道院記念館がある。



▲シャルトル聖パウロ修道院記念館の窪田よし子シスターと現存する建物
▼明治33年、竣工当時の写真



▲江戸時代初期に八代城主が建造した「松浜軒」の庭園と茶室（国指定名勝）



アルの特徴で、外壁の下見板張りやイギリスから西廻りのアメリカ経由で伝わった。このシャルトル聖パウロ修道院記念館は、ヨーロッパから東廻りと西廻りで伝わった建築様式が日本で結合した明治時代の木造洋風建築の特徴を備えていて貴重である。



▲老舗旅館「金波楼」の80畳ある大広間
▼温泉宿の伝統的景観を誇る玄関に入った正面



▼国有形文化財になったこの建物をしっかり保全すると語る三代目当主松本寛三さん



建物を案内していただいた窪田よし子シスター(70)によると、現在は、八代白百合学園100周年記念誌編集室として使われているが、記念誌発刊後の用途は現在のところ決まっていない。

日奈久温泉の老舗旅館「金波楼」

八代市街地から南へ下がると、江戸時代に藩営温泉として栄えた日奈久温泉街がある。中でも、群を抜いて大規模で豪華な老舗旅館「金波楼」が、昨年、国の登録有形文化財として登録された。

旅館金波楼の本館は、明治42年に当主松本岩三郎が地元の大工牧喜太郎に依頼して建てたもので、欄間を設けた切妻造の正門と土壁と板張りを組み合わせた塀が、温泉街の伝統的景観を形成している。

2代目謙吉が熊本市の大工に依頼した木造2階建の大広間棟は、昭和13年に建築された。

80畳敷きの大広間は、木皮を精巧に編み込んだ天井や欄間と床の間に自然の銘木を用いた数寄屋造りで、多少厚化粧の俗っぽさを感じるものの、当時の世相を反映していて貴重である。

3代目当主となる現在の社長松本寛三さん(56)は、「建物が一番の目玉。そこにどれだけ磨きを掛けられるかが、今後に懸かっている。雨戸はありませんが、欄間は素通し。客室以外は、冬も台風の時もそのままです。建物は、掃除専門の人を雇って磨き込んでいます」と、国有形文化財に登録されたことを喜んでいる。

昭和40年に新築した鉄筋コンクリート造りの新館は、昨年壊した。沢山の客を泊めるのではなく、木造3階建ての本館を中心に、「おばあちゃんの家に帰ったみたい」と、喜んでくれるお客がいることを大切にしている覚悟なのだ。

この他、八代市の近代化産業遺産としては、事業拡大を目指す九州製紙(株)の電力を賄うために、大正5年に竣工した球磨川沿いの深水発電所がある。発電機器は建設当時のまま残されている。

電力と共に鉄道も日本の産業近代化を支えた。球磨川に架かる肥薩線鉄橋の一つ、現在も列車を通して第一球磨川橋梁は、橋長205m28cm、5径間のアメリカン・ブリッジ社製だ。5径間のうち、3径間は明治35年式で、2径間は明治39年製となっている。

このように明治期の建造物を見ると、当時の八代には、西洋から流れ込んでくる新しい文化や技術を取り入れ、産業の近代化に活かそうとした進取の気性に溢れていたことが分かる。これらの近代化産業遺産に触れることによって知る先人たちの精神は、明確な目標を見失っている今こそ、地域の活性化に役立つと確信した。

写真&文 芥川仁

●八代市教育委員会文化課 ☎0965(35)2021



▲上/大正5年に竣工した深水発電所
▼第一球磨川橋梁を渡る電車。明治39年に造られた橋で近代化産業遺産の一つ



▲教育資料館(旧登米高等尋常小学校)、2階廊下より正面のバルコニーを望む
 ▲洋風様式を取り入れた2階バルコニー(栗原市から家族で見学に来た佐藤さん一家)

政都・郡都として
 賑わった街 ①

明治のロマン漂う伊達藩の城下町 旧登米尋常小学校他(宮城県登米市)

とよま観光物産センターを
 見学の拠点に

旧登米町は仙台伊達藩の一門として約300年にわたり二万二千石の城下町として栄え、歴代の当主は北上川の川筋を変えるなど数多くの事業を興した。明治維新の廃藩置県で登米県・水沢県の県庁所在地になったが、その後宮城県に統合される。これらを反映して町には明治時代の建物や文化財が残り、また北上川を利用した船運により登米は米穀の集積地として繁盛、蔵や古い商家が点在している。

晩秋の日曜日。早朝に東京を出て東北自動車道仙台南I・Cから三陸自動車道へ入り、約1時間で終点の登米I・Cへ到着する。休日割引のせいか三陸自動車道はマイカーの列が続き、松島や石巻へ向かう人たちかと思っていたが、殆どが登米まで出かける車が多いのにまず驚かされた。

登米は「宮城の明治村」と言われ、国指定重要文化財になっている教育資料館(旧登米高等尋常小学校)をはじめ水沢県庁記念館、警察資料館等があるが、それらの施設を結ぶ中央の位置に開設しているのがとよま観光物産センター「遠山之里」。公園風の広い敷地と駐車場があり、ここに車を停めて町歩きを楽しみ、センターで休憩や食事をし、農産物等を購入するのが観光客の定番のようだ。

センターの横の広場では、この日、地域の中高年の人々がアンティークなモーター付き農機具や発電機を持ちよって展示実演し、エンジンをかけてド、ド、ド…という音を楽しんでいる。納屋に放置されていた一昔前の機

街の脇を流れる北上川と登米大橋。橋のたもとには登米に行脚してきた数々の句を詠んだ俳人たちの一宿社中、紫々庵社中の碑が建っている



器たちが、手入れされ磨かれて爽快な音を立てながらフル稼働している。見学する子供やお父さんたちの目も輝いている。

広場の脇に展示された古いダットサン、その先に明治ロマン溢れる登米高等尋常小学校の建物があり、何気ない演出が冴えている感
じだ。

子供たちの足音が聞こえる モダンな学舎

旧登米町は平成17年に9町が合併して登米市となった。「宮城の明治村・登米」は市の委託を受けて(株)とよま振興公社が運営しており、職員たちは人出の多い土日に焦点を置いて働いている。塚本敏之さんと横澤健二専務が教育資料館を案内してくれた。

「明治に建てた建物や文化財が残ってきた。それを保存し、そのまま見てもらっています。歩いて15〜20分以内で主な施設が見学できるといふ利点があります。年間25万人以上の観光客があり、地元産のものにこだわって加工販売している物産センターも大変好評をいただいています」と塚本さんは言う。

明治21年に2年半の歳月をかけて落成した登米高等尋常小学校は、正面2階にバルコニーがあるコの字型に建てられた2階建て木造校舎。校舎の両側には六角形を半分に切った形の昇降口がある。「六方」というそうで、吹き抜け風の天井に向けて木を組み合わせたユニークなもの。廊下は1、2階とも吹き抜けの片廊下式で、手すりが付いている。

雨が激しい日は廊下も濡れただろうが、まだ電灯も普及していない時代だから、自然採



▲登米高等尋常小学校。中央に庭とバルコニーがあり、左右には児童が教室へ行ける「六方」と呼ぶ昇降口がある



▲明治・大正時代の授業風景を再現したジオラマ
▼手にする教科書は明治時代のもの
▶教室でオルガンを弾く見学にきた子供たち



光を重視して造られたのだろう。またコの字に外廊下があることで、どこからも児童の動きが把握できる設計になっている。樫の木を組んだ板敷廊下には水抜きをする穴もある。特徴的なのが正面にある2階バルコニー。ギリシャ建築様式の柱と手すりで構成したモダンな設計で、校長先生がここに立って登下校する子供たちを見守っていた様子が見えるようだ。屋根は寄棟造り瓦葺きで、当時としては最高に洋風な校舎だったに違いない。そんな自慢の校舎だから子供たちは教室や廊下を磨き、父兄も植樹等を手伝って皆で大切に守ってきた。いまも卒業生や児童が年数回来て廊下や教室を雑巾掛けしている。

設計監督は、明治6年にウィーン万国博覧会に派遣されて日本建築を広くヨーロッパに紹介した宮城県技師山添喜三郎で、総工費は5874円73銭。明治10年当時町の総予算が50000円位だったというから、莫大な建築費だったことがわかる。しかも山添氏は材料や建築に最高品質を求め、工事のやり直しも多かったため、請け負った地元の大工や建築会



▶上/ガリ版、映写機、教科書等の貴重な資料を展示する部屋 下/柱を六角形の放射状に組んだ「六方」という梁のある昇降口

社の多くが後に倒産に追い込まれたという。この小学校では郡下の小学生が学んだ。文部省は明治19年に「小学校令」を公布し、これまでの初等、中等、高等を廃し尋常小学校4年、高等小学校4年の8年制にしたが、20年2月に2校を統合して「高等尋常小学校」に改称、40年にはさらに「登米尋常高等小学校」に変更したが、落成当時の名称を現在も使っている。

同校は昭和48年4月に校舎としての用途を廃止したが、その後も校舎の改装時に仮校舎として使用された。昭和56年に国の重要文化財に指定され、町では62年から2年かけて保存修理を行い、明治からの教科書や大正時代

の授業を体感できる教室等を設けて「教育資料館」として一般公開した。

「この小学校では最高1800人の小学生が学び、校舎も次々増築しました。いまは裏手に近代的な校舎がありますが、総児童数は約280名、かろうじて1学年2クラスを維持しています」と横澤専務は言う。

明治の建造物とレトロな街を見学

教育資料館の南側には水沢県庁記念館、武家屋敷「春蘭亭」、警察資料館、武家屋敷が点在し、東側の北上川と並行する道路へ出ると、かつて米穀の間屋や商店、酒造所等で賑わった「蔵造り商店街」と呼ばれる通りになる。歩いて20分ほどだが、その日はイベントで、二頭立ての馬車を運行していた。少し高い位置から蔵やレトロな街を見ながら10分ほどで戻ることができて大変好評だった。貸自転車も人気だ。

水沢県庁記念館は、登米県と称した明治4年に登米町に水沢県庁が置かれることになり、翌年に庁舎が落成、明治8年まで使用された。明治9年に現在の宮城県域が成立したため県庁舎としての役目は終わったが、その後は小

学校、裁判所として使い、平成3年に当時の資料を展示する「水沢県庁記念館」として一般公開した。

冠木門を入ると堂々たる入母屋造りの屋根と破風には狐格子をつけた純日本建築だが、本棟は洋風な木造平屋建てとなっており、当時の官公衙建築を代表する建造物と言われる。

警察資料館は、明治22年に建てられ昭和43年まで使用された、洋風の木造2階建て。2階には吹き抜けのバルコニーがあるお洒落な建物で、屋根は寄棟造り棧瓦葺き、外壁は板張りにペンキ塗り仕上げが施してある。明治の擬洋風建築として大変貴重だという。

伊達家ゆかりの建物としては、旧寺池城址に渡辺政人氏の寄贈で昭和36年に建てられた「登米懐古館」がある。伊達家の鎧や兜、剣や槍、工芸品等貴重な品々が展示されている。

また武家屋敷としては400年前に伊達初代当主相模宗直が慶長9年にこの地に移住した時住んだという鈴木家の屋敷「春蘭亭」が公開されている。鈴木氏は平成元年にこの屋敷を町に寄贈したため、町では保存修理し、囲炉裏を囲んだ喫茶コーナーを設けて平成2年より公開している。この地に自生する春蘭

を加工した「春蘭茶」を提供していることから名付けられた。

武家屋敷は前小路地区を中心に15軒も現存しているが、現在も居住しているため公開はしていない。

もうひとつ紹介したいのが伝統芸能伝承館「森舞台」。登米町では藩政時代より「登米能」をはじめ「岡谷南部神楽」とよま囃子などの伝統芸能が盛んで、町民の手で伝承されてきた。「森舞台」は平成8年に美しい森の中に日本最古の能舞台・西本願寺北能舞台を参考に建設された。毎年9月には新能が上演されている。

文/浅井登美子 写真/小林恵

●(株)とよま振興公社 ☎0220-52-5566

▶上/観光客で賑わう登米観光物産センター「遠山之里」、建物と店内下/とよま振興公社の横澤専務(右)と塚本さん

◀磨き上げた古い車や農機具を使ってエンジン実演会



▲武家屋敷「春蘭亭」



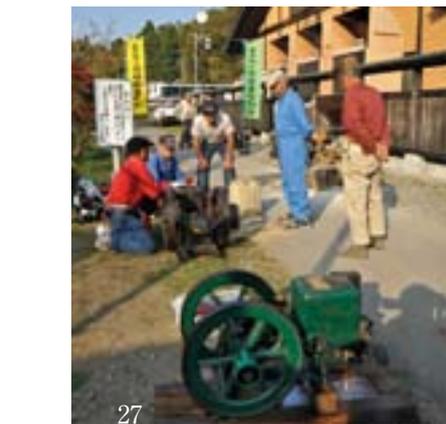
▲水沢県庁記念館



▲古い民家がよく似合う和菓子処



▲2頭立て馬車に乗って武家屋敷や蔵の街を見学(レトロフェスタの時だけ運行)



▼「まちじゅう博物館」の出発点となる萩博物館



江戸時代の城下町絵図が現在でも使用できるほど、萩市には江戸時代に造られた街がそのまま残り、「まちじゅう博物館」という言葉が定着している。長州藩政の中心として栄えた城下町、毛利氏が萩と瀬戸内海側を直線で結ぶために築いた萩往還、そして伝統工芸品萩焼等々が人気を呼び、萩市街地には年間150万人以上の観光客が訪れる。しかし忘れてならないのが萩反射炉、恵美須ヶ鼻造船所跡、松下村塾等の近代化産業遺産。幕末動乱の時代に日本を欧米列強から守るため、近代技術による大砲鑄造や軍艦造船に取り組んだ先人たちが活躍した街でもあった。

城下町の成り立ちとその保存

萩市は慶長9年（1604）に毛利輝元が居城を広島から萩に移し阿武川河口の三角州



▲萩博物館に展示される萩焼き



▲観光客で賑わうなまこ堀の蔵

“史跡の宝庫・萩”のもう一つの魅力 鑄造・造船で近代化に挑戦 (山口県萩市)

に城下町を建設したため、廃藩置県に至る260年あまり毛利36万石の城下町として発展した。城下町は次第に拡大、そのため江戸中期には大溝の開削等で治水を安定させ、嘉永2年（1849）には三角州中央の低地を造成して藩校「明倫館」を従来の約15倍の規模に拡張移転している。大正14年には念願の鉄道が開通したが、三角州の外側を迂回する形で敷設されたため、武家屋敷地区は開発を免れた。また戦後の開発でも、三角州中央辺りの水田やはず田等に道路や市役所、学校を建設し、旧街を壊さないことを重視してきた。そのために現在も江戸時代の古地図が通用する城下町になっている。現存する武家屋敷、商家には国の重要文化財に指定されている家も多く、武家屋敷や土堀が続く堀内地区と平安古地区、さらに港町として酒・味噌・水産業で栄え「藩の台所」を担った浜崎地区が重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。

日本の近代化を担った

吉田松陰、長州ファイブ

この城下町からは多数の政治家や学者を生み、幕末や明治維新の日本の近代化に尽力した。特に幕末から明治維新の原動力となった政治経済人、産業人を育成した吉田松陰の影響は大きい。松陰は日本各地をまわって見聞を広め、25歳の時アメリカへ密航しようとして失敗し萩に閉じ込められた。しかし叔父玉木文之進が自宅で創始した私塾「松下村塾」(萩市東船津)に講師として勤め、日本の未来を担う青年たちを指導した。松下村塾で学んだのが高杉晋作や伊藤博文、造船を始めた渡辺靄蔵ら。



◀江戸時代に建築された明倫小学校の南門(右)と現在の校門

伊藤博文らは後に「長州ファイブ」と呼ばれ、文久3年（1863）に英国へ密航留学し、帰国後は明治日本の近代化に大きく貢献した。初代内閣総理大臣となった伊藤博文、初代外務大臣の井上馨、鉄道庁長官の井上勝造、幣局長の遠藤謹助、造船技術を学び後に工部大学校（東大工学部の前身）を開いた山尾庸三の5人である。

松陰は萩を去った後も、人材育成に力を入れ、学問の機会均等や実技を重視した工学の促進を訴え、それが長州ファイブの5人や全国の若者たちに受け継がれていった。

また、長州ファイブに影響を与えた長州藩は、文久3年と翌年に2度にわたって下関で欧米列強と戦火を交えるが、攘夷は不可能だと悟り、薩摩藩と共に軍事力を強め、欧米の最新兵器を輸入する方針へ移行。それが幕府打倒の国内戦に使われ、明治政府樹立に繋がったという。

大砲製造へ挑戦——萩反射炉

反射炉は西洋で開発された金属の溶解炉で、火薬の衝撃にも耐える強靱な鉄を製造するための施設。佐賀藩が嘉永3年（1850）に初めて建設。薩摩、水戸藩等が続き、長州藩も鑄造法を学ばせるため佐賀へ大工棟梁の小沢忠右衛門を派遣した。スケッチしてきたものを基に設計し、安政3年（1856）にひな形を造り鉄製大砲の鑄造に取りかかったという。

1200度以上に熱した炉の前方に溶解室を置く。鉄に含まれる炭素と空気中の酸素を結合して二酸化炭素を排出すると柔軟で粘りのある鉄が生まれるもので、高い煙突で大量

に空気を取り込む必要があった。

萩市椿東前小畑・コンビニの裏手の丘に萩反射炉の煙突部分が残り、周辺を公園として整備している。煙突部分全体の高さは約11m、地上から6.5mのところまで二股に分かれているが、実際は独立した2本の煙突だった。煙突は地上9mまでは玄武岩をしっかりと固めているが、その上はレンガを不規則に積んでいる。

佐賀や葦山の反射炉が16mの高さまでレンガをきちんと積んであるのに比べると萩は規模が小さい、また地下炉の構造や大砲の鑄形台が見当たらない、水路がない等の理由から、萩反射炉は実用炉ではなく試験炉として造られたのではないかと専門家は見ている。また、実用炉製造には莫大な経費がかかるため、途中で中断したという説もある。

とはいえ、江戸時代に築かれた反射炉では萩と伊豆葦山の2カ所しか現存しておらず、貴重な遺産であることに変わりはない。

2艘の洋式軍艦を造った 恵美須ヶ鼻造船所跡

反射炉のある場所から直線で約600mの小畑浦。海岸に石組みの防波堤だけが残っており「造船所跡」の石碑がひっそり立つ。ペリー来航で洋式軍艦の導入を考えた長州藩だが財政難。その藩を動かしたのが桂小五郎後の木戸孝充。江戸で洋

式造船技術を学んだ小五郎は伊豆半島戸田村でスクーナー船の製造を見学して自信を深め、長州藩に軍艦製造を働きかけた。

船大工らを戸田村に派遣したり戸田より大工を萩へ招聘する等して、安政3年10月に最初の洋式軍艦「丙辰丸」の建造を開始、全長25mの木造帆船で12月に進水式を行なった。続いて2艘目の製造に取り組み、万延元年（1860）に全長43mの「庚申丸」が完成した。この造船所では大板山たたら製鉄で生産した鉄が使われたという。高杉晋作が江戸まで航海するなど、これらの帆船は国内では十分機能したが、欧米ではすでに蒸気船の時代。長州藩もその後は製造を止めて、文久2年（1862）より英国から船を購入するようになる。

防波堤の石には、長州藩と萩の先人たちが果敢に挑戦した痕跡が残っているようだ。

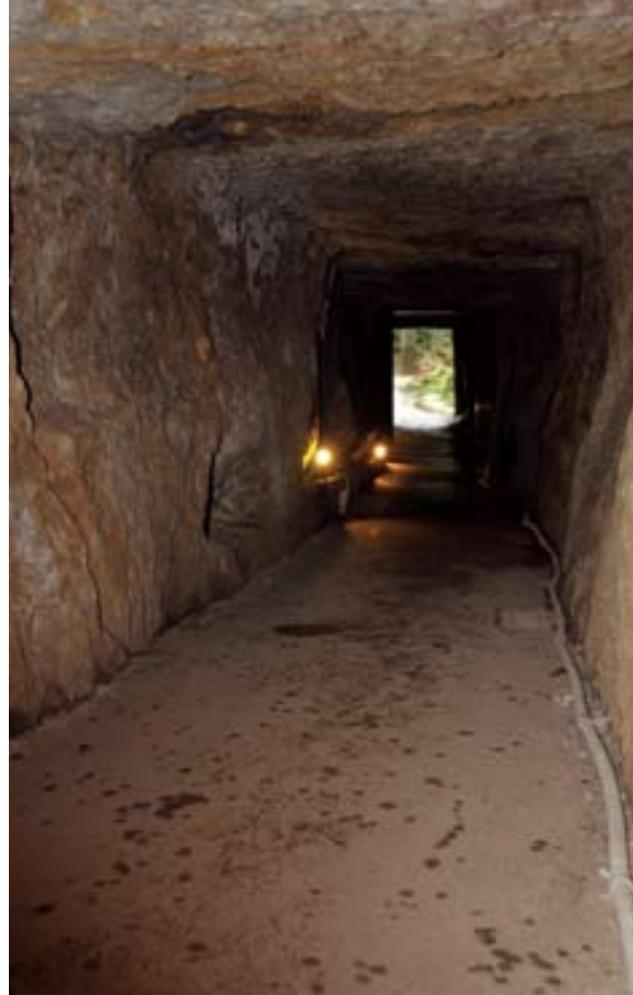
文／横田塔美
写真／小林恵



▲萩反射炉のある公園とレンガの煙突

●萩市観光課 ☎0838-25-3139
●萩博物館 ☎0838-25-6447

◀恵美須ヶ鼻造船所跡に残る石組みの防波堤。右は近くにある稲荷神社。船の安全を祈願して漁師や船主が今も参拝している



●地域の歴史文化を次世代へ①

「世界遺産の街」の保全と新たな魅力づくり 石見銀山・温泉津温泉

(島根県大田市)

銀山をめぐる武家大名たちが争奪戦

▲清水谷製錬所跡/明治19年に大阪の藤田組が仙ノ山の福石鉱床に着目して近代的な製錬施設を建設。しかし鉱石の品質が悪く採算が見込めないため明治29年に操業を停止した
▶龍源寺間歩/1715年に開発された間歩で、江戸時代には長さ500mに及び、石見銀山では大久保間歩に次ぐ大坑道。石見銀山には露天掘りも含めて600以上の間歩が確認されている。下は入坑口(右)と鉱脈に沿って掘った小さい坑道

仙ノ山(標高537m)一帯で銀鉱が発見されたのは延慶2年(1309)、石見の守護であった大内氏だったが、本格的に開発を始めたのは16世紀初頭、博多商人の神屋寿禎だった。寿禎は朝鮮半島と交易をしていた富豪で、天文2年(1533)に朝鮮から二人の技術者を招いて、「灰吹法」という精錬法を取り入れた。灰吹法による精錬で良質な銀の採取が可能となり、それが国内の鉱山技術の基になった。鍊金(銀)術の発展は英国等で産業革命を起こしたと言われるほど重要で、灰吹法は後に佐渡金銀山や生野銀山でも普及していった。

平成19年7月、「石見銀山遺跡とその文化的景観」がユネスコ世界遺産に登録決定した。石見銀山遺跡の中心部だった大森地区、銀を搬出した沖泊港とその近くにある温泉津温泉、初期に銀山搬出港だった鞆ヶ浦、大浦、仁万等の港、さらに陸路で牛馬を使って銀を運搬した銀山街道等々、遺跡の対象となる地区は広大である。しかも石見銀山が発見されたのが13世紀で、17世紀前半には産出も激減し大半が休山したため、隆盛時代の痕跡を鮮明に検証することは難しいが、世界遺産に指定されたことで、間歩(坑道)が公開され、製錬所跡を見学するコースも整備された。現代に浮かび上がった石見銀山400年の歴史と魅力、人々の暮らしを、大森地区と温泉津温泉で取材した。

灰吹法とは ①銀鉱石を要石の上に乘せてかなづちで叩き、その後水の中でゆすりながらより分ける。②細かくなった銀鉱石に鉛とマンガンを加えて溶かし、浮き上がった鉄などの不純物を取り除き、鉛と銀の合金「貴鉛」を造る。③貴鉛を「灰吹床」で加熱し、鉛を灰へ浸みこませ、銀が灰の上に残るようになる。これを繰り返して純度の高い銀を造る。灰吹法は西アジアでは紀元2000年前に行われていたが、日本では石見銀山が最初だった。

さて、戦国時代になると石見銀山の領有は大内氏から尼子氏に、さらに毛利氏の支配になるが、「本能寺の変」以降は秀吉が毛利と和議を結び、石見銀山で大量の石州御用甲銀を造ったらしい。秀吉はこれを朝鮮侵略の戦費に充てたが、関ヶ原の戦いの後は徳川幕府の管轄となり、大久保長安の指揮で増産が行われた。

探鉱と精錬は慶長から寛永年間に隆盛期を





▲代官所跡(資料館)／正面の長屋門は1815年の建築、中の資料館は明治35年建築の旧蓮摩郡役所。膨大な資料を収蔵、公開している



▲石見銀山へ至る大森地区の街。民家を保存活用して喫茶をする家も増えてきた



▲ガイドの説明を熱心に聞きながら史跡を見学する観光客。徒歩約2時間で銀山コースが見学できる

迎え、年間約1万貫(38t)を産出、海外に数多く輸出された。石見銀山の銀が世界の銀の3分の1を占めたといわれ、16世紀にヨーロッパで発行された世界地図には「Hiwami」「銀鉱山」とラテン語で記載されている。しかし16世紀半ばには坑道は深くなるものの産出は減り、17世紀前半には大半が休山に追い込まれた。最盛期には奉行・代官ら60人が銀山御料約4万8千石を統治していたが、衰退期になると徳川管轄から代官統治へと格下げになる。

大森の住民全言が保存活動に

明治維新後は、松江藩家老が再建に着手、後に藤田組が維持管理を続け、藤田組は明治28年には2年かけて近代的精錬技術を駆使した清水谷製錬所を完成した。しかし銀鉱石の産出は期待できず、一年半余りで操業を止め

た。その後も保全は行っていたが、昭和17年の水害、18年の台風で壊滅的な被害を受けて、完全休業、無人のヤマとなった。この清水谷製錬所、永久坑道と永久製鉄所跡、発電所跡(柑子谷)等は近代化産業遺産と言いうことができる。そんな中、昭和32年に大森町に石見銀山の文化財を保存する会が全戸加入で発足した。石見銀山遺跡の歴史と史蹟保存を県国に呼びかけ、住民たち自らも街並み保存活動を行い、それが世界遺産選定の原動力にもなった。大森町の代官所から南へ約1km続く街並みは、銀山経営の中枢として栄え、街には代官所、役人の町屋、公事宿が軒を並べており、これらが今も残って情緒ある街並みとなっている。山麓には鉱山に由来する神社や寺も10所はあるのか。それぞれに物語があり、住民が詣でてきた。世界遺産登録後も、街並み地

区の街路には草花を愛する人々の普段着の生活があるのが嬉しい。

銀山地区の丘の上には一昨年、新たに世界遺産センターがオープンした。ここで車を止めてバスに乗り換えて大森地区へ行くことになる。銀山観光の入口には大田市観光協会の観光案内所が開設され、ガイドの会が龍源寺間歩(坑道)までの約1kmのコースを約2時間ほど歩いて案内してくれる。私たちが訪ねた日は土砂降りだったが、観光客は熱心にガイドの説明を聞きながら見学している。現在、住民生活への影響を配慮してマイカーの侵入はもとよりバスの運行も止めている。高齢者には少しきついが、歩くことで感じたり見えるものが多く、このような規制は観光客にも歓迎されているようだ(車椅子の使用、申請すればハイヤーの手配も可)。メイン道路の他に遊歩道も整備され、山吹城址へのハイキングコース(3時間)もある。

銀搬出港沖泊から由緒ある湯の街へ 温泉津温泉

石見銀を世界へ輸出する重要港だったのが温泉津沖泊港である。16世紀に開港して毛利元就が支配、江戸時代には銀山奉行支配人の幕府直轄地となり、銀や物資の搬出入で繁栄した。銀山が衰退してからは北前船の基地となり、また大正7年に鉄道が開通するまでは、湯治場にくる温泉客の船便で賑わった。波ひとつない穏やかな入り江はいま、地元漁船が利用しているだけだが、かつて多くの船が停泊していたことを語る「鼻ぐり岩」が数多く残っている。牛馬の鼻輪のように石

▶上/温泉湾の北部にある沖泊の入江。ここからも銀輪送の船が多数出航した
下/温泉津温泉街の俯瞰。山沿いには神社や寺も多い



▲築260年以上になる内藤家の建物。その先に温泉津港がある



▲温泉津港の岩場に多数残る「鼻ぐり岩」。船を係留するために造られた

をくりぬいたもので、船を係留するために使われた。湾の周りには鉄工所跡も見える。沖泊湾はリアス式海岸で、木々が鬱蒼と茂る道を北へ進むと、美しい小さな入り江があった。ここからも物資を搬出入していたように、入り江の脇には航海の安全を祈願した恵比寿神社があり、古い民家が数軒立ち並んでいる。数百年の時をタイムスリップしたような不思議な場所だが、道路が狭いため、観光

初期の建造が多いようだ。元湯温泉「泉薬湯」を営み、湯治客に愛されてきた「長命館」は、築100年の木造3階建。崖側に建つ別館の外壁板が剥がれだしているが、中に入ると驚いた。長年磨きあげて使われてきた広い板張り廊下、太い天然木を組んだ階段や手すり、その左右に障子を張った客室が並ぶ。部屋は10〜20畳ある純和室で、床の間や欄間等も凝っている。広く機能

客を積極的に受け入れていない。温泉津港の発展と共に形成され、全国に知られる温泉地として賑わっているのが温泉津温泉。地名は「温泉郷」に由来するという。毛利元就の命を受けた毛利水軍御三家の一つ、内藤内蔵丞が15世紀半ばに沖泊に鶴の丸城を築いて統治し、毛利氏撤退後も温泉津に土着して庄屋、年寄りを代々務めた。その間、廻船問屋、酒造業、郵便局等の経営にも携わってきたという。

温泉津港から温泉街に入る場所に内藤家の建物がある。温泉津大火（1747）の後に建てた屋敷で、裏手には酒造所や荷揚場の跡も伺える大変貴重な文化財である。温泉津には昔から薬湯として知られてきた元湯、明治5年の浜田地震で湧出した新湯、大正8年に掘削した小浜湯があり、温泉街は二つの公衆浴場を中心に旅館が20軒ほど軒を連ねている。どの宿も木造3階建てで、大正時代、昭和

的に整った厨房には膨大な食器が収納されており、団体の湯治客で賑わうことが多いのだろう。「建物も古くなり私たちが年取ってききましたので、以前のようにはいきませんが、湯に入ると食事や休憩をしていくお馴染みさんが多いんです」と伊藤綾子さんは言っていた。いま温泉津温泉で最も現代風な湯処として人気があるのが明治5年の浜田地震で噴出した温泉を活かしている「薬師湯」。大正8年にハイカラな木造洋館を建て、温泉効果を活かした健康管理や休息と食事、団らん等のメニューをつくり、ゆったりくつろげる部屋やサロンを設け、温泉地に新風を興した。

経営は内藤一族の末裔である内藤家で、現在喫茶サロンを営んでいるのは17代目当たる内藤央真さん（30）。少年時代より英国やオーストラリアで生活し、夏休みには温泉津に戻っていた。海外で弁護士資格も取得しているが、幼い時育った温泉津の素晴らしさや日本の伝統文化に関心が高くなり、司法関係の仕事は地方にいてもネット等を通じて可能なことから、5年前に帰郷した。温泉経営をする母親の陽子さんを手伝いながら、若いセンスを活かした街づくりにも取り組んでいる。1階は骨董品や絵画ギャラリーを併設した喫茶サロン、2階は大正時代の雰囲気を持つ和室、新館の「薬師湯」2階にはエステサロンもあり、女性客に人気がある。ギャラリーでは森守さんがスケッチした温泉津の街や家、行事等を描いた絵を展示している。「バスの運転手をしていましたが、解体する家が目立つようになったため、消えて



▲大正時代に建てられた長命館の内部。磨き上げた廊下や柱、広くて豪華な和室



▲「北斗山庭」という植栽を長年続ける佐々木孝久さんと氏が撮影した写真



▲ライトアップした薬師湯の建物と喫茶・ギャラリーのあるサロン
▶喫茶サロンを営む内藤央真さんと央真さんが淹れてくれた珈琲

いく前にとスケッチを始めたんです。10軒はなくなりましたね」と、薬師湯の前の道路を掃き清め、持参した花を玄関に生けていた。温泉街を歩くと、酒屋の店頭で沢山の写真を張り「北斗山庭庭主」という看板があった。これは店主佐々木孝久さんが、隣にある駐車場奥の林に、長年数々の樹木を植えて仕立てあげ、それを写真に撮ったもの。一町歩以上ある斜面には巨樹を背景に盆栽仕立ての照葉樹等が植えられて、見事な庭園になっている。「仕事よりこちらの趣味の方に夢中でして」と笑う。昭和44年まで造り酒屋を営み、市会議員として温泉津の街並み保存に取り組んできた時期も。趣味の名刺には「美湯庭風流温泉津・北斗山庭たぬきや」と印刷されていた。ところで、世界遺産に登録されたことで町並みや家屋の保存はどうなったかについて、大田市石見銀山課今田善寿さんに伺ってみた。「伝統的な建築物を修理する場合、800万円を上限として、屋根、壁、建具、構造材に対して80%の率で補助制度があります。現在40軒が申請中で、私たちの仕事もこの対応に追われています」



▲朝早くから常連客で賑わう薬師湯



▲温泉津の街をスケッチしてきた森守さんと作品

▼家族や小グループ客で賑わう温泉津温泉。右はもう一つの公衆浴場「泉薬湯」



また観光客数は、石見銀山関係の施設利用は昨年（平成20年）は81万3200人だったが、今年は5月の連休以外は3分の2に減っているという。温泉津の宿泊客も、以前は早めの予約が必要だったが、今は空き部屋もあるようだ。それについて今田さんは「石見銀山には一日2000〜3000人が訪れます。それで丁度いい。温泉津温泉も経営者が高齢化してきていますので、この位が丁度いい。昔から団体さんより個人のお客様を大切にしていた温泉地です。何度も来なくなる街にしたいですね」と語っていた。

文／浅井登美子 写真／小林恵

●大田市石見銀山課 ☎0854-82-1600
●大田市観光協会 ☎0854-89-9090

●地域の歴史文化を次世代へ②

地域の宝として引き継ぎ、交流人口の拡大を 魚梁瀬(やなせ)森林鉄道

(高知県安田町、馬路村、田野町、北川村、奈半利町)



▶昭和16年建造のコンクリートアーチの堀ヶ生橋。下は橋の上の道路

高知県中芸地区の銘木「魚梁瀬杉」を海岸まで搬出するため、明治44年に国内3番目の森林鉄道が馬路村から田野間に開通した。この鉄道は林業の繁栄だけでなく、沿線住民の交通機関として活躍、物資や文化まで運ぶ大切な足だった。時代は移り、昭和38年には廃線となったが、「もつ一度走らせたい」という人々の熱い活動で、魚梁瀬ダム湖畔には復元した機関車が走り、当時の面影を残す隧道や橋梁跡等の中から18カ所が昨年国の重要文化財に指定された。

トコから蒸気機関車へ 2線が開通して地域が発展

県木にもなっている魚梁瀬杉は、徳島県境に近い馬路村千本山周辺に自生しており、樹齢200年以上、樹高50〜60mの天然杉は「日本三大美林」の一つになっている。96%が山林の馬路村や周辺町村では林業が基幹産業であり、魚梁瀬杉を搬出する鉄道の開通が悲願だった。

明治42年、田野と魚梁瀬間をつなぐ安田川線の森林鉄道が設計され、43年に工事が着工、翌年から総延長21・234mが開通した。この時点ではトロ(トロッコ)に木材を積んで川上から川下へむけて運搬する方法で、帰りは犬ぞりでトロを引きあげたという。その

後支線などの路線を広げ、大正9年に蒸気機関車が導入され、枕木の取り換え、

木造トラスト橋の鉄橋化等が行われた。

軌道沿いには民家が密集していたため、軒下ぎりぎりに列車が通過したり、軌道を通勤通学に歩く風景が見られ、木材の搬出と共に沿線住民の足として連絡車の運行を開始することになり、昭和11年には村役場が乗車券を発売したが、木材運搬が本来の目的であるため「運行中万一如何なる災害が発生しても補償は致しません」という心得が駅に掲げられていたという。

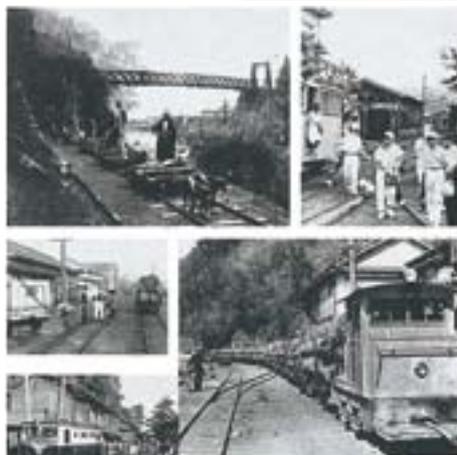
しかし安田川線では、釈迦ヶ生く久木間の逆勾配区間の運航が厳しかったため、新ルートが求められ、奈半利川沿いに奈半利川線を開設することになった。昭和4年から工事が開始さ

後支線などの路線を広げ、大正9年に蒸気機関車が導入され、枕木の取り換え、

木造トラスト橋の鉄橋化等が行われた。

軌道沿いには民家が密集していたため、軒下ぎりぎりに列車が通過したり、軌道を通勤通学に歩く風景が見られ、木材の搬出と共に沿線住民の足として連絡車の運行を開始することになり、昭和11年には村役場が乗車券を発売したが、木材運搬が本来の目的であるため「運行中万一如何なる災害が発生しても補償は致しません」という心得が駅に掲げられていたという。

しかし安田川線では、釈迦ヶ生く久木間の逆勾配区間の運航が厳しかったため、新ルートが求められ、奈半利川沿いに奈半利川線を開設することになった。昭和4年から工事が開始さ



▲保存会が昨年制作したガイドマップ
◀安田川線の昭和初期頃の写真
(同ガイドマップより)



▲昭和7年建造の小島橋。鋼トラス橋とガーター橋を組み合わせた全長143m、森林鉄道の中では最も大規模な橋



▲立岡二号棧道。昭和8年建造の石積高架。農業用道路や田畑を避けるため造られたもので、緩やかなカーブ曲線



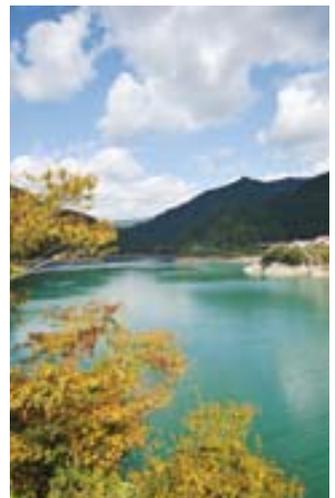
▲法恩寺跨線橋。昭和6年に参道として造られたコンクリート橋



▲犬吠橋。馬路～魚梁瀬間開通当時は木造だったが、大正13年に鋼トラス橋に架け替えた。谷底から足場を組む写真も残っている



▲二股橋。昭和15年建造の無筋コンクリート2連アーチ橋。全長46.9m、幅3.5m、堀ヶ生橋と同規模。橋と川との景観美が人気



▲森林鉄道廃線につながった魚梁瀬ダム。湖畔には機関車を展示する丸山公園、宿、森林保養センター等がある

◀魚梁瀬杉の木材市場。木目がきめ細かく美しい魚梁瀬杉は建築材だけでなくバッグやインテリア用品として人気

戦時下で鋼材が不足したため無筋コンクリート橋もあつたという。樋の口駅には修理工場や車庫が並び、鳥駅は旅館、商家が軒を並べる街へと発展していった。

最も発展したのが魚梁瀬で、林業関係者が移住してきて小中学校や診療所も出来、行商人が多数出入りする駅前は、戦後は朝市として発展した。



れ、17年に全線が開通した。戦時下で鋼材が不足したため無筋コンクリート橋もあつたという。樋の口駅には修理工場や車庫が並び、鳥駅は旅館、商家が軒を並べる街へと発展していった。

最も発展したのが魚梁瀬で、林業関係者が移住してきて小中学校や診療所も出来、行商人が多数出入りする駅前は、戦後は朝市として発展した。



鉄道史蹟をガイドしてくれた依光さん。5町村のまとめ役としても活躍

新たな地域資源として活用

しかし昭和38年に魚梁瀬ダムが建設され、その当時の集落はいま湖底に眠っている。ダムの建設で道路が整備され、魚梁瀬森林鉄道も惜しまれながら38年に廃線となったが、当時の隧道や梁橋等は各地に点在している。その中の9件が近代化産業遺産群に、旧魚梁瀬森林鉄道施設9基5カ所、附けたり4カ所の計18カ所が平成21年に国の重要文化財に指定された。

取材地を案内してくれたのは依光香代子さん。高知県地域づくり支援課に配属、安田町、馬路村の地域支援企画員として活動している。その日は日曜日だったが、自宅のある高知市から安田町へ出かけてきてくれ、森林鉄道の遺産施設をガイドしてくれた。

「3年前に前任者の春田曉さんから引き継いで事務局の支援をしています。県は平成12、13年に近代化遺産の調査を行い、その結果、魚梁瀬森林鉄道の遺産が価値あるものと認識されたようです。17年に『中芸地区森林鉄道遺産を保存・活用する会』が発足、地域の宝として後世に引き継ぐと共に、遺産を新たな資源と捉え、他の地域資源と組み合わせることで交流人口の拡大をめざしています」と依光さんは言う。

20年に保存会が「中芸地区森林鉄道遺産調査報告書」を作成して文化庁に提出、翌21



▲五味隧道。トンネルの先には馬路の村が広がる。トンネル入口の土を除去して線路を敷設した



▶五味隧道に立つ「中芸地区森林鉄道遺産を保存・活用する会」会長の清岡さん
◀河口隧道。大正4年に建造した石造隧道で現在村道として利用



▲機関車を格納する車庫。修理復元した機関車を見に鉄道ファンが訪れる
▶谷村式機関車を運転する井上さん



魚梁瀬杉の生産地・馬路村ではその日、ゆずの収穫を祝って「ゆずはじまる祭」が開催されていた。はちみつ入りゆず飲料「ごっくん馬路村」など、J A馬路村のゆず製品は有名である。

祭りの日、木の温もりに溢れたJ Aの一室では「原画展」として魚梁瀬森林鉄道の写真や鋸等が展示されていた。担当の桐野聡子さんは岡山出身、「ごっくん」のコマーシャルを

「もう一度林鉄を走らせた」関係者の熱心な活動

大正・昭和時代に大量の木材を乗せて走る鉄道、鉄道に乗りこむ高校生らの姿を写真等で紹介、さらに5カ町村の公共施設等も紹介する貴重なガイド書で、鉄道ファンにも人気とのことだ。

年には隧道や梁橋の「旧魚梁瀬森林鉄道施設」が国の重要文化財に指定された。

広域で国の重要文化財に指定されたのは我が国で初めてで、依光さんのような熱心な県職員がいてまとめ役を担ってきたからと言える。依光さんは「いま県が行っている事務局の仕事を地元で行ってほしい」と願っている。

保存会が作成した『森林鉄道』というガイドマップは、大正・昭和時代に大量の木材を乗せて走る鉄道、鉄道に乗りこむ高校生らの姿を写真等で紹介、さらに5カ町村の公共施設等も紹介する貴重なガイド書で、鉄道ファンにも人気とのことだ。

子供頃から見ていたため、今春鳥取大学農学部を卒業、馬路村に住みたいと、J A馬路村の採用試験を受けた。合格して広報に配属され、企画したのが魚梁瀬森林鉄道の歴史。写真は清岡博基さん、山の用具は山師の人から借りたという。

翌朝「森林鉄道を走らす会」や「中芸地区森林鉄道遺産を保存・活用する会」の会長を務める清岡博基さん(68)に、村内の遺産施設を案内してもらいながらお話を聞いた。馬路村の議会議長を務めながら、長年にわたって鉄道施設の保存を呼び掛けてきた人。

「林鉄(森林鉄道)は昭和32年、魚梁瀬ダムの建設決定と共に廃線が決まりました。木材の運搬が目的だったが、住民の重要な交通機関でもあった林鉄、でも田舎の乗り物というコンプレックスもあって、自動車輸送に変わることは近代化で嬉しいと住民は感じていた」と清岡さんは当時のことを振り返る。

廃線から30年余り経ち、森林鉄道への関心が薄れ出した63年7月、林鉄を懐かしむ声があり、営林署の旧職員や村の活性化をめざす関係者が集まって「森林鉄道を語る会」が開催された。そして、もう一度林鉄を走らせたという声が高まり、「森林鉄道を走らす会」へと発展。平成3年に魚梁瀬ダム湖畔にある丸山公園に軌道を敷設し、ついに機関車(修復野村式・復元谷村式)を走らせること



右/ゆずはじまる祭 左/魚梁瀬森林鉄道「原画展」を企画した桐野さん(右)と依光さん



▲6段の水切り瓦が敷かれる藤村製糸の繭蔵。明治32年に酒蔵として建築された建物



▲藤村製糸の広い敷地に立つ安光恭一社長

●馬路村教育委員会 ☎0887-38-2511
●安田町、奈半利町、北川村、田野町の各教育委員会

に成功。続いて6年には馬路温泉の近くにミニ森林鉄道を敷設し、大正時代に走っていたワルシャード蒸気機関車の3分の2モデルを復元し、日曜祭日、夏休みに走らせるようになった。
清岡さんが、馬路集落の入口にある五味隧道へ案内してくれた。「このトンネルは出征、集団就職、学校の先生が赴任してくるなど、村民にとって別れと出会いの境界でした。村に戻ると、トンネルの先に村落が広がり、ふるさとを実感する場所でした。それが道路工事の時埋められてしまっただけです」

製糸産業黄金期の威容を誇る

藤村製糸(株) (奈半利町)

四国にも製糸産業に取り組み企業があった。大正6年、藤村米太郎が創業した藤村製糸で、群馬県から技術者を指導員として招いて従業員80人で操業を開始した。当初は近郊農家から集めた繭を加工し

「森林鉄道を走らす会」では、シンボルを復元しようと、平成9年に当時の形状をとどめる五味隧道の入口の土を除去、それに続く鉄橋まで線路を敷いた。隧道は機関車が停まれるほどの長さだったが、20mほどの線路が復元された。そこに天竜林業高校から譲り受けた酒井式機関車を修理復元して、動態展示した。
「トンネル内に格納し、休日には道行く人たちに懐かしく見てもらったのですが、3年ほどでトンネルの湿気のためにエンジンがかかりにくくなり、現在丸山公園の保存鉄道で動

ていたが、養蚕業が盛んになるにつれ収集地は四国全域になり、さらに自由化になってからは群馬へも買い付けに出かけた。昭和25年には新しい繰糸機を設置して従業員220名になり、32年には自動繰糸機を導入してさらに近代化を図るが、国内の養蚕は斜陽化する一途。中国から繭を輸入して操業を続け、品質No.1の生糸として高い評価を得るが、平成17年にやむなく工場を閉鎖した。現在はブラジルに工場を持ち、現地の人を技術指導している。

19年に製糸産業の黄金期の威容を残す建物として近代化産業遺産に認定された。安光恭一社長(72)は「四国にもこのような製糸会社があったことを知ってもらいたいと、閉鎖時ままの機器が並ぶ工場も見学できるようにしました」と語る。6段の水切り瓦を葺いた繭蔵は明治32年築で酒蔵として使用したもの

態保存しています」

丸山公園は休日ともなるとはるばる鉄道マニアが訪れたりしている。

機関車の運転手は森林鉄道運営委員の井上洸士郎さん(64)。日曜祝日、夏休みに公開運転し、子供らが乗車したり運転を体験できる(有料)。井上さんは「野村式機関車も文化財になると嬉しい。今回文化財に指定されたのは森林鉄道のごく一部で、山間部の支線にはよい状態の史跡が残っているので、今後調査を続けて欲しい」と語っていた。

取材・写真/小林恵



▲自動繰糸機が並ぶ工場内部
●藤村製糸(株) ☎0887-38-2696

だという。工場は自然採光を取り入れるノコギリ設計で、オートメーション機器が整然と並んでいる。古い糸紡ぎ機等も残っているの

各地の近代化遺産・近代化産業遺産

申義堂、開明学校 卯之町が重要伝統的建造物群保存地区に

(愛媛県西予市)



▶右／申義堂 左／旧宇和町小学校

卯之町は昔から教育が盛んで、最古の学舎は、明治2年に建築した平屋建て瓦葺き木造の申義堂。その後明治15年に新校舎として建てられたのが現存する開明学校。木造2階建ての擬洋風建築物で、アーチ型の窓等、棟梁都築熊吉の創意工夫の跡が見られる。

この開明学校と申義堂を含む約4.9haの地域には、大正15

年建築の日本メソジスト教会卯之町支部(平屋木造建てし型施設に付随して4階建・頭部に十字のある礼拝堂)等、江戸末期から昭和初期の建物が残っており、昨年度の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

保存地区の近くには、大正4年に建てられた旧宇和町尋常高

登窯、酒造場煉瓦煙突、煉瓦蔵 煉瓦窯再生プロジェクトも発足

(福島県喜多方市)

喜多方市岩月町三津谷の旧樋口窯業は、明治時代から創業する赤煉瓦工場で、10連房式の大規模登窯が残っている。ここで生産された煉瓦は明治・大正時代の近代化建造物に使用され、今でも喜多方市の街並み景観を特色づけている。酒造所の煙突や煉瓦による屋敷、蔵等の他に、



▲上／10連房式の大型登窯
下／登窯室の修復をして、煉瓦製造に当たる

等小学校の講堂と校舎一棟、昭和3年に建てられた新校舎を移築し、米の博物館として利用されている宇和米博物館がある。

特に昭和3年の校舎は平屋建ての超横長木造校舎で、109mもある内廊下は、子供や若者の雑巾掛けレース会場としても使われ、町おこしの一つとして人気がある。西予市教育委員会文化の里振興室 ☎0894-6216700

トンネル、鉱山の坑道等で使用された。平成19年経済産業省の近代化産業遺産で喜多方市では「登窯」をはじめ9つの建造物が「建造物の近代化に貢献した赤煉瓦生産などの歩みを物語る近代化産業遺産群」に認定された。

岩越鉄道(現磐越西線)のト

ンネル、加納鉱山の坑道、若木商店煉瓦座敷蔵、大和川酒蔵煉瓦煙突、若菜家煉瓦蔵など市内の酒造所の煙突、蔵等に赤煉瓦が多数使われている。

三津谷登窯で焼成を行える技術者は現在2名しかいないため、市では平成20年に「三津谷煉瓦窯再生プロジェクト」を立ち上

飛騨匠の技が冴える 瀬戸川沿いの白壁土蔵、酒蔵

(岐阜県飛騨市古川町)

鯉の泳ぐ瀬戸川と白壁土蔵の続く街並みで知られる古川町。その一角にある古民家や酒蔵な

どがこのたび国の有形文化財、近代化遺産に登録された。軒下の小腕に施された木の葉や唐草の紋様を彫刻した「雲」、角材を繊維を編むように組み合わせた「出格子戸」等、飛騨匠(大工)の技が活きる独特の佇まいが特徴。近くには「飛騨の匠文化館」や、伝統技術の生掛け和

蠟燭、一位一刀彫を制作する店もある。近代化遺産に指定された建物は3件。

- ・ 蒲酒造場(主屋、袖蔵、文庫蔵、仕込蔵) 宝永元年(1704)創業の酒造所で、「白真弓」「飛騨の強者」等の日本酒を造り続けてきた店で、白壁の美しい蔵も遺産に登録された。
- ・ 渡辺酒造店(土蔵別館、主屋、漬物蔵) 明治3年創業、北アルプスの伏流水と山田錦で造る

げ、窯に火を入れて煉瓦を製造するための職人養成コース、体験コース講座を開催している。土と薪を大量に使うため採算を取るのには難しいため、市や県が助成金を出して煉瓦焼成技術を高め赤煉瓦の普及を図りたいとしている。喜多方市商工課 ☎0241-2212030



瀬戸川沿いの白壁土蔵

「蓬菜」が飛騨地酒として人気の蔵。

- ・ 料亭旅館「ハツ三館」(本館、大広間、土蔵)。荒城川沿いにあり安政年間より高山の奥座敷として知られる料亭で、3棟が有形文化財に指定された。

飛騨市観光課 ☎0577-731211

明治時代建造の現役灯台 海上保安庁で保全管理

灯台を管理する海上保安庁では、築後100年を経て歴史的・文化的価値の高い、明治時代建造で現役で活躍している灯台をAランク灯台に指定し、保存に力を入れている。以下は、近代化産業遺産に認定される灯台。

尻屋埼灯台（青森県東通村）
金華山灯台（宮城県石巻市）
犬吠埼灯台（千葉県銚子市）
観音埼灯台（神奈川県横須賀市）
神子元島灯台（静岡県下田市）
清水灯台（静岡県）
御前埼灯台（静岡県御前崎市）
菅島灯台（三重県鳥羽市）
姫埼灯台（新潟県佐渡市）

北の大自然と開拓時代の歴史文化を次世代へ 52件の北海道遺産

稚内港北防波堤ドーム 宗谷
丘陵の周水河地形 森林鉄道蒸気機関車「雨宮21号」 流水と方リンコ号 ワッカ／小清水原生花園（2地区） オホーツク沿岸の古代遺跡群 ビアソン記念館 摩周湖 野付半島と打潮舟 根釧台地の格子状防風林 霧多布湿原 旧国鉄士幌線／コンクリートアーチ橋梁群 ラワンふき モール温泉 留萌のニシン街道 増毛の歴史的建造物 旭橋 雨竜沼湿原 土の博物館「土の館」 北海幹線用水

緑剛埼灯台（石川県珠州市）
経ヶ岬灯台（京都府京丹後市）
潮岬灯台（和歌山県串本町）
友ヶ島灯台（和歌山県）
江崎灯台（兵庫県淡路市）
美保関灯台（島根県松江市）
出雲日御崎灯台（島根県出雲市）
角島灯台（山口県下関市）
男木島灯台（香川県高松市）
鍋島灯台（香川県坂出市）
釣島灯台（愛媛県松山市）
室戸岬灯台（高知県室戸市）
部埼灯台（福岡県北九州市）
水ノ子島灯台（大分県佐伯市）
鞍埼灯台（宮崎県南郷町）
伊予島灯台（長崎市）

路 空知の炭鉱関連施設と生活文化 江別の煉瓦 北海道大学札幌農学校第二農場 開拓使時代の洋風建物 札幌苗穂地区の工場・記念館群 路面電車 小樽みなとと防波堤 ニツカウチスキー余市蒸留所 積丹半島と神威岬 京極のふきだし湧水 スキーとニセコ連峰 北限のブナ林 昭和新山国際雪合戦大会 登別温泉地獄谷 静内二十間道路の桜並木 内浦湾沿岸の縄文文化遺跡群 姥神大神宮渡 柘祭と江刺追分 函館山と砲台

過疎地域自立促進特別措置法の一部を改正する法律案要綱（案）

- 一 平成17年国勢調査の結果に基づく過疎地域の要件の追加
現行法の過疎地域に加え、現行法の考え方に即し、平成17年国勢調査の結果に基づき、以下の1及び2に該当する地域を過疎地域として追加すること。（第2条第1項関係）
- 人口要件：以下のいずれかに該当すること。
 - 昭和35年～平成17年の45年間の人口減少率が33%以上であること。
 - 昭和35年～平成17年の45年間の人口減少率が28%以上で、かつ、高齢者比率（65歳以上）が29%以上であるか、又は若年者比率（15歳以上30歳未満）が14%以下であること。
*ただし、(1)(2)の場合、昭和55年～平成17年の25年間で10%以上人口増加している団体は除く。
 - 昭和55年～平成17年の25年間の人口減少率が17%以上であること。
 - 財政力要件：平成18～20年度の3カ年平均の財政力指数が0.56以下等であること。
- 二 地方分権改革推進の観点からの過疎地域自立促進方針等の策定に係る義務付け等の見直し
過疎地域自立促進方針（都道府県が策定）、過疎地域自立促進市町村計画及び過疎地域自立促進都道府県計画について、これらの策定に係る義務付けを廃止するとともに、市町村から都道府県に対する事前協議の内容を見直す等の所要の措置を講ずること。（第5、6、7、15条関係）
- 三 過疎地域自立促進のための特別措置の拡充
- 過疎対策事業債の対象の追加
 - 過疎対策事業債の対象となる施設に、①認定こども園、②図書館、③自然エネルギーを利用するための施設、を追加するとともに、小中学校の校舎等について統合要件を撤廃すること。（第12条第1項関係）
 - 地域医療の確保、住民の日常的な移動のための交通手段の確保、集落の維持及び活性化その他の住民が将来にわたり安全に安心して暮らすことのできる地域社会の実現を図るため特別に地方債を財源として行うことが必要と認められる事業として市町村計画に定めるもの（基金の積立てを含む。）の実施に要する経費について、人口、面積、財政状況その他の条件を考慮して定める額の範囲内で、過疎対策事業債の対象とすること。（第12条第2項関係）
 - 減価償却の特例の拡充
国税（所得税・法人税）に係る特別償却を行うことができる事業のうちソフトウェア業を廃止し、新たに情報通信技術利用事業（コールセンター）を追加すること。（第30条関係）
 - 地方税の課税免除又は不均一課税に伴う措置の拡充
地方税の課税免除又は不均一課税に伴う措置の対象業種のうちソフトウェア業を廃止し、新たに情報通信技術利用事業を追加すること。（第31条関係）
 - 失効期限の延長
現行の過疎地域自立促進特別措置法の失効期限〔平成22年3月31日〕について、6年間の延長を行い、平成28年3月31日とすること。（附則第3条関係）
 - 施行期日等
 - 施行期日 この法律は、平成22年4月1日から施行すること。ただし、「四 失効期限の延長」に係る改正は、公布の日から施行すること。（改正法附則第1条関係）
 - 関係法律の改正等 関係法律の改正その他所要の規定の整備を行うこと。

函館西部地区の街並み 函館市路面電車 上ノ国の中世の館 五稜郭と函館戦争の遺構 福山（松前）城と寺町 「北海道全般の遺産」 屯田兵村と兵屋 北海道の馬文化 アイヌ語地名 アイヌ文様 アイヌ口承文芸 サケの文化 北海道のラーメン ジンギスカン NPO北海道遺産協議会事務局 011-218-2050 ★「でぼら」29号では「みんな必死に働いたあの頃―産業遺産―」特集で、北海道遺産である美唄炭鉱、夕張炭鉱他を取材しました。

編集後記

▼近代化遺産を語る場合、建造物の規模や姿形だけではなく、殖産興業の必要性を訴えた政府、新しい時代を造るという進取の精神で建築や土木に当たった人々がいたことが最も重要だったと、いま改めて思う。それに比べると今の社会は、政治は…？ と彼らに問うてみたい。

▼近代化遺産の場合、窓口は教育委員会が多いが、別の業務に追われて多忙。他に観光的要素のある市町では、地味な近代化遺産への関心度は低く、見学者の姿もほとんどない。調査し資料をきちんと纏めている自治体がある半面、ガイドなし資料なしというところも。逆に近代化遺産を観光や地域活性化に活かして観光客等で賑わっている地域もあり、その温度差は大きい。遺産を地域の産業再生に活かす試みも始まっており、注目していきたい。(A)

De POLA[でぼら] No.38 2010年春夏号

発行日／平成 22 年 3 月 5 日
発行所／財団法人過疎地域問題調査会
〒105-0001 東京都港区虎ノ門一丁目 13 番 5 号
第一天徳ビル3階
☎ 03-3580-3070 FAX03-3580-3602
http://www.kaso-net.or.jp/
編集協力・印刷／株式会社ぎょうせい 編集工房アド・エー

歳月を越えて たどりつくところ。

ひとしずくずつが集まって流れになるように。
一人ひとりの夢が集まって大海原級のパワーになります。
行きつく先は、身近な暮らしの快適さ。そして、皆さまの笑顔です。
宝くじの収益金は、身近な街づくりに活かされています。



宝くじの収益金は、
身近な街づくりに役立っています。

当せんはしっかり調べて、しっかり換金。



財団
法人

日本宝くじ協会

<http://www.jla-takarakuji.or.jp>

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。